



沙 ■ 羅 良 沙 々 良 良 囉 娑
ラ 修 囉
沙 ■ ら 沙 羅 さ □
羅 ら 紗
□ 囉 沙 沙 佐 良 佐 々 良 良

目次

| | |
|-----------------|---|
| 修羅ら沙羅さら 1 | 1 |
|-----------------|---|

修羅ら沙羅さら 1

修羅ら沙羅さら 一篇以二部前半蘭陵王三章後半夷族一章附外雜部

蘭陵王第一

かくに聞キ、その時期壬生友則異國ダナン市に住シキ是レベトナム中部ナる観光都市ナリ妻と俱なり此ノ人現地ノ人なり壬生その日庭にひとり出で、ひとりなりキ妻ノ家の庭なりかくて壬生思はずに氣附キ、アボカドの若樹マンゴーの大樹の葉の翳りにいつの間にか二壬生ノ背丈よりモ遙かに高く伸びてヲりたりキ壬生ひとりひそかに觀喜せりかくて頷して

あなたに話そう

秘密めかして、あえてそれが

まさにあなたに、

内緒話だったかのように？

ひそめた、あくまでひそめとおした聲を

誰にも知らせない、そんな

さゞめいたひそひそ聲を、飽く迄

なにを隠す氣も無い儘の

擬態しおせたままで？

その、泡沫めいた玉散るしぶきに

これ抑市場で買ひたるアボカドなりキ妻ノ食シタル後の種ヲ壬生戯レに植ゑたりキか乃時壬生まサかにモ芽吹クとハ思はざりキユゑにそバなるマンゴーが樹ノ事など考慮せざりてかくてたゞ放置してかくて忘れてたりキアボカドが種土にみづからふれみづから新芽を出シ又アボカドが種土の水にみづからふれ美豆迦羅新芽を出してかくてすデに三年の年経リ互阿利支是レ生ヒ伸ビたるアボカドはすでにシテ大樹なるマンゴーの茂レる葉と枝又葉、と枝、にフレナントすにも達シキ稚樹が葉又葉、すでに緑りなりテ匂ひたつほど緑りなりてかくて緑りなりキ故レ壬生雙つノ木その儘にこそ合ヒながらに葉ト枝の葉、と枝、の葉生ひ生ひにおいたつほどに枝、ノ翳りをにおいたつほどに突キ破りて行くとノみ思ひヲりキ而レドにおいだつほどまでにアボカド此の先住のマンゴーをにおいたつほどまでも避けて横に縦ににおいたつほどに伸びテ自在ナリキカクテにおいたつほどの棲ミ分けて枝と葉においたつほどに枝、と葉、ノ巧妙を空間ににおいたつほどまでも曝しキ此レら互ヒにふれズして伸ビにおいたつほどの邪魔せずして伸びテ瑕においたつほどに附けずシテ伸ビ阻害シアはずに伸びタリゆゑに壬生においたつ心に思ひ

テ曰ク樹木たちには意識があるに違いない。…かれらに、…彼等にだけ固有の、彼等に固有の彼等の彼等だけの意識が。その、…俺には意識とも思わない意識、…そのかたちが。そして彼等固有の言語。…かれ等にだけ固有の、…言語。俺にはもはや言語とさえも思えない言語が。我々が思ってもみなかったかたちで、不意の。不意打ちの言語が。…わたしたちにだけ、まさにわたしたちにとってだけ不意の抜き打ちだったようなかたちで言語は、…それ。まさに鮮明に、…それ。——と壬生ひとりにおいたつように或は、意識と言語とのみだけが可能にしていたとは思えない。それ、交流を。交歓を。ふれあい、ささやきあい、想いをいだき、いだき合うことを、それ。なにかを思うことを。それ。その、かくてかくなりてかくて頌シて

あなたに話そう

ひそめられた聲に似て、まさに

色づく

まさにあなたの爲に話そう

その、それらさまざまにも

ひそめられた聲に似て色づき繁茂した、或は最早

それは自生していたというべきだったろう。

色のある——その色というの

或はもはやみだらなまでにも？

その、放置

ひそめられた聲に似て、まさに

色づく

その、放置されたアボカドの木は

それら。…好き放題に色づいたいろの、色というと色の

緑りのみだらなまでの

わたしの手のひらの上からこぼれちたと云うだけであって。飽く迄もそれは

その色彩。色の微細な翳りの

光は音も無く自在な乱反射をさらしていた

むしろあくまでも野生の樹木というべきだっただろう

繁茂する緑りの色の。色と色の

単に、単に緑りと言葉はそれを謂う

何を云えると

ひそめられた聲に似て、まさに

色づく

何を云えるというのだろう、それに對して？

いまだに繁殖しない緑りの。

その色彩。それ、色というと

わたしはそう思ったのだった。

色彩。花のないままに。花も無い儘に拡大してゆく

色というの。色づく。色づき、色と色の

假りに、それらがわたしのかたわらで、——わたし。…と、わたしのユエンの傍

らで？

その色。向こうには垂れさがる蔦が。色づく

繁茂した緑りの

わたしの？…彼女の家族たちの傍らで？——わたしのそばで

その色彩。光沢、さまざまな。

雨は降っていなかった。その朝には

わたしには一切の關りをゆるさないそれらの自由の、まさにそれらの自在の。

背後に鳥の羽根が鳴った。

その光沢

あなたに話そう。

ないし自在の、まさに

ひそめられた聲に似て、まさに

色づく

ないし自在の、まさにそれらの自由のうちに、それらにだけ共謀された繁茂をさ
らしたとしても。

さまざまな散った頭上の音響は

色づく、様々に

ユエンは時にわたしを呼んだ。聲を

その時、わたしの耳だけに、音響は

あるいはみだらな

生長したアボカドの木を見せる爲に。殊更にも

…緑り上の

みだらなほどの繁殖の

わたしはユエンとユエンの目の前で、殊更にも驚き、そして

ひそめられた聲に似て、まさに

色づく

そして笑った

若い木はいまだ、幹さえも緑りなのだった。

繁殖の赤裸々な。そして色の

ユエンと同じように——共謀して？

細く。わたしの身長よりは高く

色といろと色の。赤裸々な

ふたりで。ふたりだけの

しなやかに。アボカドの若い木は

色といろと色の、それら色づく

ふたりの爲に？ ふたりで

且つすでに強靱な

その色彩。あるいは色といろに溶け込んでも猶

壬生は聞いた。その一瞬に風が吹いたに違いなかった。葉と葉、又は枝と枝、又は
葉と枝、葉と枝、そして葉と枝がこすれて一度鳴ったのを。庭は広がった。樹

木はさまざまに散在した。それらすべてがひとしく同じ高さの葉に鳴ったと彼は思った。頭のすぐ上にだけ風とも言えない大気の動きがあったに違いなかった。見上げた。日に葉が照った。かくて偈を以て頌して曰く

ほほえむしかないほどに
笑う。時には
あざやかなかたちと色の匂い立つのを見た
耳元で、ユエンが
いつかの雨の朝にも
わたしにだけ
ひろい庭の
内緒にしたようなかすかな鼻で
その隅に、真ん中に、通り道を圍んでまでも
笑い聲を聞かせて
樹木はおなじような色の
すぐ背後で
さまざまな固有の色の固有をさらす
より添うように
ほゝえむしかないほどに
その耳も
その雨の匂いの
たしかに聞いていただろう
あるいは雨にぬれた葉と雨の匂いの中に
飛沫にゆらぐ
その冴えた臭気に
葉こすれの音を

かくに聞きゝアボカド若樹又アボカド若樹とマンゴー大樹又マンゴー大樹に觀ジたる他人の交歓の觀壬生みづからにも奇想に思ハれ又あやしく想ハれ又まさにも正しくとこそ思はれてアリき時にあやしいほどに七月なりて七月ハあさましいほどにもすでに深かシ此ノ時あやしいほどにうつくしい日本に夏ノ盛りハ遂に兆さレをはりなんあやしいほどにベトナムに盛夏ハ既に盡きゝこれより後あやしいほどにもやゝゆるやかに年ノ暮れ行くあざやかに乃ミなりダナンあざやかなほどにも十一月に一氣にあざやかに気温を落とセり是れあざやかすぎるほどにも二十度前後なりきあやしいほどに是れまさにもこのちるしづき嚴寒ノ季節ならん此レあざやかに厥レちるしづきこゝの亞熱帶ノ都市ナルがゆゑに也あやしいほどに此の時壬生ハあざやかに散るそのはにしづきすデに半年無職なりて此ノ時職なき儘なりキ是れひまつ三月比にあやしいほどに蔓延化シ始メたるひまつ新型コロナがはなにひまつ影響ナリ壬生元日本語教師なりキ一度はなのひまつちるのはのつゆのしづき騒ぎ鎮化し得をハリタル六月末そのなかに二カ月の休職アケに失職せりそのなかにベトナム人社長まなざしのそのなかにちるひまつそのしづきのひまつの詫びテ壬生笑ミテ赦シ又笑ミかヘシテ彼ヲしづきその行く末ヲ彼ノ爲に案じキ所謂あやしいほどに送り出シ會社なりキひまつとびたまちるしづき學生タるベトナム人悉クはのしづくのひ

まつたまちりしぶきちり日本渡航なし得ず又そのあやしいほどに見通しなくゆゑにはなのうえのつゆはちり会社が収入途絶へけるはのうえにつゆはたまちった儘なりテカルがユゑにさめたまなざしがみたその高給の外國人を養ふ魅力すでに会社にしぶくはとのうえのつゆはしぶきあざりきこのとキすデにそのしぶきちりそしてたまちりベトナム法人半年近き無収入のまなざしのなかにひまつはちり慘狀なりきとび又とびちり市中ノ經濟復興本格化し得ざりテあめのあとののはのうえに又たまちる失職する人多く又職なき日本人あやしいほどにはなのうえにも溢れかて日本人ラ大半すでに日本に歸りキあやしいほどに壬生が妻ベトナム人なれば壬生その儘あやしいほどに異国に留まりキ妻賢シかれバ壬生ノ現狀にあやしいほどに何ノ不満を言うも無かりき是れあやしいほどに時勢ノ當然ナルゆゑなりすでにあやしいほどに壬生も孀も知れりなにも力にもあやしいまでに停滞するはたダ理なりと又あやしいほどにすデに觀じきまさにあやしいまでに目にも理見エテ視エテ觀エテ觀エむシろ笑フがほどにも理あざやかに理に過ぎテて理なりてかくてその7月のその24日のそ乃朝壬生妻をかノ女の働ク會社にバイクに送りき是れあざやかにもうつくしく日常の常なりてテかの孀が名ユエンなりこの女あざやかに流通系企業ノ經理なり又あざやかすぎて所謂日系企業なりてかくてあざやかに壬生送りをはりて返りにゴックが家にあざやかに寄りきあざやかすぎて金曜日なりきゴックは休みなりきかくてあざやかにしぶけ

むさいげんなまでもそのすあてきら

たばしりしぶけ

嘗てノ同僚なりて今かの女週四日の出勤シか許されずあざやかに教師もさめたまなざしは事務員も悉く同じさめたまのまなざしは待遇なりきあざやかに給料半減されたり是れさめたまのまなざしはひとりゆめのようにエンジニアのあざやかなス術も無し又抗うスベもなくゴックはゆめのように壬生にゆめのようにさめてみた逢へるをあざやかに素直にゆめのように喜びきかくてさめてみたあざやかなひまつ後この日夕方ユエン歸りて蟹股ノすり足に歩ミよりあざやまに歩ミ寄りテ壬生にあざやかに言さくふたたび又ひまつちりたまちりしぶきコロナ發見されたりトその英語はのうえにそして殊更に大げさナ身振りに飾られキ又手振りにはとはなのうえにそのつゆの煽られキ表情すデにシテ雄辨ナリテ壬生あざやかにしぶきちり女乃ひとり面白がりヲりタれるにも觀じき壬生あざやかにしぶき知れりかの女本氣でおびエテをりキ又さめたまに知れりかの女殊更にさめたまのまなざしに案じてをりき又みたそのひまつ知れりかの女容赦なきまでおのゝきてありきダナンにあざやかに1人發見されおよそ50人あざやかすぎて今日隔離されたりさめたまに是市中感染なるゆゑなりユエンさめたまにみるさめたまの彼にかくに云しき怯えてまなざしはさめたまにゆめに案じおのゝきてスマートフォンを弄り続ける妻をあざやかにソ乃日は壬生はしぶくしづくのひまつ抱かざりきたまちり背ムけたる肌にしぶくゆめの唇ヲふれ息にのミ笑ひさめたまにゆめにユエンキ附かずかくテ頷シテ

あなたに話そう

笑う

まさにあなたの爲に話そう

そしてゴックは

夢を見て、——と
笑うのだった
その夢を見てめざめたのだと私は思った。わたしは
まるで
色のさまざまの色と、そのかたちのさまざまのかたちを匂いさえ伴って見ていた
のだった、と。

自分がいやらしい女であるかのようにも
確実に、目を開いた瞬間にはそう思って居た筈だった
いやらしいこゝろで
もはや影も名残も何もなくて、その深い午前に、私は二度目に目覚めた
ゴックは胸の上に
十一時近くに、まどろみから。
笑う
かたわらに女が笑った。
聲を立てゝ
最後まで行きつきもしない儘に、途中やめでやすんで、いつのまにかやめて、そ
してかたちのないうたゝ寝におちる

その息を
そんな（——いつものように）一方的な不作法を咎めもしないで
吐かれる息を
女が（——いつもくりかえされたように）笑った息を立てた。
さまざまに
息が（——いつも）かかった。
みだして
肌が爬虫類のように（——いつでもくりかえされたように）敏感だったら。
くずして
例えば蛇のように（——まさにそのひも）敏感だったら。
まるでいやらしい女のようにも
木漏れの翳りの中の、濁った白色の蜥蜴のように、せめてその（——こゑを）複
眼の視野のように敏感だったら

見た。ゴックは
わたしはその温度に（——こゑになるすんぜんの）気付いただろうか？
わたしを顯らかにいやらしい発情した生き物として
その生き物の（——いきづかいを、）温度に
肌は瑞々くて
それはゴックだった
張りをもつ
すでに、わたしの肌に——額の。頬の。鼻先の。唇の先の。顎の先の。…女の髪
が懸かっていた
ゴックの肌は、未だに

眼差しの右の傍らに片肘の、半身覆いかぶさったゴックの鬘りは逆光のなかになめらかなままに
見えていた。その色も
潤いを感じさせる儘に
その形も。あられもないほど
殊更に
温度のある肌が匂った
いやらしいものゝように装って？
かすかに笑った息の、その吐かれた臭気ともない匂いの、いやでも無ければこのましくもない
さまざまにふれた
匂い。ただの、生き物の体内の浅いところがうつした無穢ではない
いじるように
匂い。——眠いの？
たわむれるように
ゴックが殊更に甘えた日本で（——妻は）言った。
わたしの肌を
眠くて、（——ユエンは、）眠い？
なつかしむように
自分の聲に（——日本語が話せない。英語で、）こびるようにして。だから（そして）ゴックは聲に戯れた。
ひとりあそびをするうかのように
私は（すこしのベトナム語で、）目を閉じようとした。
なじるように
——知ってる？
わたしの肌の
私は云った
そのかたち、あるいは
——樹ってさ、...あれ、言葉、話すよね？
色を
——え？（、と。ええ...？、と。え、えー？、と。え、...ええー？、と。ええ？、と、）
触感を
と。
いじめるように
極端にながくのぼして、そしてゴックは臆て笑った
処罰するように
笑ったからだがゆれ、ゆすられたゝびに髪が（って?...え？）皮膚を（え、ええ...）くすぐった。わたしの（...え、）皮膚を
茫然としたように
その、たとえば額の

いきなりに
たとえば頸の
我に返ったかのように

たとえば胸元の
確認するように
たとえば頸の付け根の

指先に
たとえば顎の
その温度を

たとえば唇の
触感を
或は額の

そのかたちを
——なに?...話さないよ。

その色をまでも?
——話すよ。

豊満な女
——夢見たの? 夢見てるの?

笑うしか無い程に
——見てない。

あきらかに
——お伽話なの? (——むずかしい日本語、知ってるね?——簡単だよ。)

肥満の手前に
——100%現実。

肉のいやらしさをもて余す
——ジブラの映画だね。

いやらしを擬態して
わたしが目を開くと、女はふと羞ずかしげな媚を眼差しに、これみよがしに撒き散らした。

ゴックは耳元に笑った
——たぶん、...言葉以外で、なんか...どうにかして、あれ、話していると想うな。

わたしの耳元に、不意に
——わたし、わからないよ。

聲をかけたかのように (驚かせよう?)
——意識。それが常に俺たちが知るとおりの形式だとは限らない。むしろ、俺たち意識の方こそが例外的な形式であって、

わたしにだけ
——難しいね。

聲をかけたかのように
——何が?

いやらしく

——日本語が。

いやらしさを擬態して

——俺は、かれら、話してると思うよ。

感じたあとに

——言葉で？

内臓の中に

——言葉じゃない言葉みたいなもので。(…あるいは人間だってさ、言葉以外の…——そう？)

そのかたちを

——だったら、(——感じ合う、そんなことも、)日本語だよ。

観じたあとに

ゴックは云って、(——…じゃない?)そして笑い、笑い(——なにそれ?) 訖る前に、そして(——ん、)かの女は云った。

その温度を？

——たぶん日本語話してるんだよ。

温度の輪郭のように感じられた、くっきりとした

ゴックは執拗に指先でわたしをいじるのをやめなかった(様々な細部に至るまで)

かたちを

暇つぶしのように(——すべ、す、すべ、すうべしてるよ。——そう?——いい匂い。)

もうすぐ三十になる、と

取り敢えずはそれ以外に持て餘された時間を(そう察知)やり過ごすすべなどないかのように(——いい匂いするね。)

ゴックの唇はそう云った

ないし、それが愛の、(そう察知してしまった)…その形式の、取り敢えずのひとつのかたちであるかのように

いやらしく

ゴックは(そう察知してしまったかのように)5年近く日本に留学していたと云った。

擬態して

二年遅れて弟も日本に留學した。すでにして

自分のいやらしさを擬態して

それなりの資産家の娘だった。資産家の、箔をつけようとした

自分でだけ

来年、ないし再来年? いずれにせよ Covid19 の後でベトナムの資産家の娘が世界のどこかを選ぶのかは知らない。

わたしのいやらしさをこそ描き出して

もはや日本ではないのかもしれない

ひとり、自分でだけで

移動不能な中国との解決しがたい長い永い領土関係のせいで、結局は近隣の日本なのかも知れない。

何度も（そして何度も）ゴックは聲を立てた

あるいはファン・ヴォイ・チャウの頃から變らずに？...日本から迎えた、

いつでも、（何度も）かの女は（何度もかの女は）

あるいは迎えられた日本で會った、相変わらずの啓蒙家気取りの莫迦なジャップに時に喰いものにされながら？

わたしのかたちを胎内に（いつでも、何度もかの女は）

わたしのように...穢れもののように？ 喰いものにする、必ずしも飢えた譯でも無い善良な餓鬼どもに食られながら？

感じつづける時の

かわいらしく肌の白いゴックは三年前にベトナムに歸った

つづくかぎりに

二年遅れの弟と一緒にだった

獸の咆哮じみた濁音

日本語のかわいらしく肌の白い教師を始めた

死にかけの獸の

弟はサイゴンで働いた。専門は、...土木?...都市開發？

死に懸けて、更に憎悪と恨みを忘れない

家をダナンの海邊に買った。

むしろあざやかに際立てた

弟はクアン・ナムの山際の実家を新築した。

そんな濁音

大阪の人々を語った。

その短い微弱音の連続

むかし、日本のホテルでバイトをしていた

喉に

日本人はいい人だ、と。かわいらしく肌の白いゴックは色目遣いの生徒にそう云った

何かを真似しているのだと思った

日本人が来たら緊張したと私に云った。（——怒られた？——ん？ やさしいよ。）

いやらしさを装って

日本人は（——やさしいけど、）みんな厳しいからと（——緊張するね。）云った。

無様なそれは

ベトナムでは（——うるさいから？）だれもが（——莫迦だから？）新型コロナを嫌悪する。（——ん？）

どこかのだれか、...日本の?...を。例えば。真似したのだと思った

ベトナムでは（——やさしいよ。）だれもが新型コロナを恐怖する

喉に鳴り続けるそれは

日本人って、怖くないの？

その無様なだけの音響は
ヤンが云った。彼は
いやらしさを擬態させて
送り出し会社の専務だった
ゴックは笑う
日本人って普通だね。...ヤンは云った
わたしの上で
政府って何もしないよね。...ヤンはそう云った
倒れるように身を伏せて
日本人って、何もしないよね。...ヤンは云った
その豊満さをおしつぶす
日本人って、怖くないの?...ヤンはそう云った
いやらしを擬態して
鮮明な軽蔑と懐疑の形式で。(——でも、)
肥満の手前の豊満さを
わたしの腕が彼女を(——いい国だね。日本は)やさしく押しのけようとしたと
きに、ゴックは不意に不安をさらした
壬生先生、何歳?
その眼差しに(赤裸ゝなまでに?)
おもいだしたように云った
赤裸ゝに
唇に
——なに?
わたしの顔を盗んだあとで
と。
四十五
そう聞いたのは私の方だった
答えた私にゴックは笑った
——どうしたの?
見えないね
——どこ行くの?
若いね
ゴックは私に(...窺うように)尋ねかけていた
日本人だから?
怯えた色のあるささやき聲を(...猜疑と懐疑)以て(鮮明な)
外人は若く見えるね
立ちあがったわたしは彼女を見下ろしていた
あどけなさを擬態して
彼女のベッドの上で、ゴックは身をお向けて、あくまでもだらしない儘に四肢
を広げた

ゆがめた

トイレ、...と（その豊満な、肥満手前の）

唇と頬を

そういいかけて私は、振り返って、見て、そして云った。笑いかけて

ほほえみを擬態して

——ジブリ。（——何？）...おとぎ話な映画。（——え？）...は、あれ、ジブリ。

笑んで笑った

聞いて、聞くともなく、臆而条件反射のように女は笑い声を（媚びた笑い声を）立てた

ゴックは素直に

抱かれて、女は（ゴックは素直に）幸せだった。あどけないまでに

ほゝ笑んでわたしの

まだふたりともなにも着ていなかった。その午前十一時に、ベッドに上半身だけ起こして、ゴックは壬生を見ていた。立ち上がり、ベッドをぬけだして断りもなく、ゴックに歩く背筋と太ももの息吹を見せた。想わずに彼がそのまま家に帰るような気がした。壬生は美しかった。そのかたち、顔も。しなやかな筋肉のひそかな流れ、骨格の意外ないかめしさも。壬生はいつでも優しく笑い、そして獣じみた危うさが肌のにへばりついていた。ゴックはなにか言いかけた。壬生は思わず立ち止まって、そして逆光の翳りにゴックを見た。白く豊満なベトナム人は、逆光の一瞬の中にすでに人のかたちさえなくした。かくて偈を以て頌して曰く

腐乱しかかった桃の果肉の匂いがする

はじまるよ（——蟹股で）

ゴックの肌は

かの女はみみに（——蟹股で）そういった

たるみかけた肉の色を

ささやきごえで、（——蟹股で、すり足で）はじまるよ

無言の内にも誇って

あしたから、また（——足をすりつけるように）はじまるよ

じぶんがいつでも

かの女は（——歩く）みみにそういった

今も、誰にも

ほほえみながら（——ゴックは蟹股で）

誰の眼にも

じゃれつくように（——いつもの蟹股で）

可愛らしくあることをただ

わらいながら（——すり足で）

確信して

こゑさえたてゝ（——なすりつけるような蟹股で）

腕の中で、いつでも喉を

もうすぐ、（——猫背の儘で）かいげんれいがもういちど

かたく締める
戒厳令がまた（——猫背の儘にのけぞって）まちに
聲をなど、決して誰にも
町にまた（——蟹股で）はじまるよ
聞かせてはらないのだと
いま（——蟹股で歩く）
恥じらう譯でもなく
ひろがった。（——すりつけて）きたないいきものが
かならずしも
ちいさなきたない、いきもののようないきものらしい、ちいさな穢い（——蟹
股の）それが
羞じを知っていた譯でもなくて
もういちど（——ゴックはいつも）
ゴックはまるで当然のように、自分の
みんなのちかくに（——するように）
喉が聲を立てるのを禁じる
すぐそばに（——こすりつけるように）
いつでも瞳孔の開いた眼を向けた
あぶないウイルスが（——蟹股で）
私に。——むしろ
いきづかう。（——ゴックは歩いた）また
これみよがしなほどに
はじまるよ。（——蟹股で）かのじよは
憑かれたどう孔の開いた眼の片すみにみた
みみに（——猫背の儘）そういった。ささやきごゑ
私を。——わたしが
わらったような（——蟹股で）
たとえかの女の背後に
ささやきごゑで（——のけぞったように）
ほかの誰かとわらうときにも
はじまるよ。（——ゴックは歩いた）もういちど
はじめてわたしを知ったときに
まちのかくりが、（——蟹股で）はじまるよ
はじめて肌に
もういちど、かのじよはみみに（——すり足で）
男をしまったときに
はじまるよ（——こすりつけるような）
もはやただせき裸々に
そういった。（——蟹股の）ささやきごゑで
瞳孔のひらいためをわたしにむけた。...しってる？

はじまるよ。(——ゴックは歩く) どこにもいかず
あなたは知ってる?
とじこもる。そとは(——蟹股で)
おんなたちがどこでも
だれもがあぶなくて(——すり足で)
だれも、いつでもでさらす
はじまるよ。きたないままの(——鼻に抜ける)
そのまなざしは
のばなしの、——はじまるよ。(——甲高い)
どうこうのひらいたまなざしは
むほうちたいが、(鳴り響く)
しってる? まるで
はじまるよ(——たかく鳴り響く)
ひらいたくちのようにみえる
ひろがるよ(——ゴックの聲)
なにもみないで——しってた?
はじまるよ。(——蟹股で) かのじよはみみに
のみこむくちに。しってる?
そういった。(——すり足で歩き) ささやきごえで
どうこうの
はじまるよ。みえないきんが(——鳴り響く)
あなたたちのどうこうのひらいた
いきいきと、(——これみよがしに) いつかだれかを
めはいつも、ひらかれたはなの
のばなしに(——鳴り響く)
あなのように——しってる? みえる。しってる?
ころすのよ(——響きわたる)
そのひらかれたくち
のばなしに。(——高い聲) はじまるよ
そのひらききったはな。あなたは
かの女はみみに(——抜ける聲)
はなのあな
そういった。(——飛び上がる) かのじよは
しってた? うったえるなにもなかった
わらう。(——飛び上がる聲で) わらいながら
ささやくなにもなかった
かの女はおびえ(——ささやく) めを
なにをも、それは
見はる。(——ゴックは) はじまるよ
なにをもきざしもしなかった

うしろのまどを（——蟹股で）振り返れば
みてるの？ あなたは
はじまるよ。（——すり足で）かの女は
なにを...みてるの？
ぎゃっこうの中（——ささやく）その時の
ほんとうに?...みてたの？
葉のむれだけが（——蟹股で）かげりをおとし
どうこうのひらききった
なくとりの翳を（——歩みより）
おんなたちはいつも、——しってる？
はじまるよ（——ゴックがささやく）
みてるの?...なにを？
隠しとおす。その（——みみもとで）色のかげが
そのひらいたはなの
あざやかに（——甲高い声で）
しってる？
その（——舞い上がる聲で）色の翳りが
くちはかむ
私にだけは（——ささやいた）
しってる？ それは
見えていた筈だったのだった。（——ゴックはいつも）...その時には
くいちらし、くちは

かくて又

かげりゆくゆくなつのはのかげりにもイノチもどきのはん殖ノ翳
かくに聞き、7月25日壬生は朝寢室に妻を抱き、孀の名ざわつくユエンなりて漢字を當
て、ざわつきはじめ縁の一字なり壬生ユエンをざわつく抱き躬の下にざわつき敷きて耳
の傍らにざわつきはじめ女の喉の息するをざわつき聞きてざわめくまに観じてきいた
のだった半ば開きたる儘なるドアの先にみみにもめにもきいたのだった氣配ありきユエ
ンがざわつく父親か弟かのざわつく誰かが朝のざわつき何をかなすやらんかくに壬生は
思ひきユエンは耳元にざわつく短く一度だけざわつき聲を立てきかくてざわつきはじめ
てざわつくそれ途切れ途切れにざわつき間を間を置きてざわつく三度續けり壬生はざわ
つきながらざわめきに途中でやめり是れざわつく常なり壬生すでに女のざわつく身に飽
き、それよりほかにゆゑはあらずかくて顔あげたるにざわつくドアにタオ立ちて笑み聲
なき儘に壬生ら營むを見てありきタオ邪気なくて笑み笑みて殊更に笑みて邪気も無し壬
生タオを見て観をはりて臆而タオが爲にのみ笑みきかくて頌して

あなたに話そう

その朝いつもよりも
まさにあなたの爲に話そう
殊更にも
ユエンは背中で笑った

静かに見えた町は
時に聲を立てて
ざわめき立っていたに違いなかった
バイクの後ろの風の中で
忘れた頃に
怯えながらユエンはさんざん語った
ふたたび思い出された、その
笑いながら
脅威の記憶
まくし立てながら
その現在形
いかにそれが危険なのか
まさに今の進行
いかにアメリカがぼろぼろなのか
口に
Anh có bit ?
人の、人と人の
いかにヨーロッパがぼろぼろなのか
口に
Anh có bit ?
人と人との
いかに日本がぼろぼろなのか
口と口々に
Anh có bit ?
外出自粛
いかに今、ベトナムが危険なのか
隔離措置
Anh có bit ?
閉鎖
いかに世界が危険なままなのか
孤立化
Anh phi bit
社会的距離
いかに自分以外のことごとくの世界のすべての悉くが危険なのか
マスク着用義務
派手に笑って怯えながら、バイクの後ろの背中の向こうの風の中で語った
一種の戒厳令
英語とベトナム語でしきりに語った
都市封鎖
ユエンは日本語が話せない

恐怖と懷疑
わたしは聞いた
接触への不安
ユエンはひとりでさわぎながら語った
咳への嫌悪
わたしは聞いた
発熱への疑惑
或はひとりで聞いていた
口に
土曜日の市場はいつものように混雑した
口ゝに
臭った。野ざらしの野菜が蠅をあつめて、そしてそれらを感わした
人と人ゝの
コンクリートのざらついた上にカボチャの皮が日の温度を知った
口と口ゝに
ユエンは手当たり次第に買い集めた
いつもより騒がしい日だったに違いない
それ、腐るだろ？
その朝
聲が立つ
土曜日の朝は
四方に人の聲が立つ
一種の戒厳令
あくまで他人の、彼等の聲が
その前に
ユエンは云った
いつもより騒がしい日だったに違いない
大丈夫
その土曜日
No problem
その朝
ないしは
晴れた日、晴れた
Không sao
晴れ過ぎてさえ見えて、晴れ
Không vn
干からび切ったほどに瑞々しいほどに
聲が立つ
晴れあがって、腫れあがったかのようにも
他人の聲の群れのなかに、振り向き見た聲が立った

熱気の有る直射日光の
板の上に肉がゆっくりと腐敗していく
肌に
その匂いが立つ
腕の、肌に
板の上に肉が相変わらずの蠅を煽情する
肌が感じた温度
惑ったようにただ飛び舞う
その温度に
聲が四方に立った
思わず見上げた眼差しが見るのは
肉をつかんだビニール手袋の手がそのままに皺の紙幣をつかみ取った
空。青い...
肉を骨ごとに断つ
わたしの目は
ユエンは Kg 単位で買った
一種の戒嚴令の前に
牛肉を買った
様々な社会倫理の暗躍の前に
豚肉を買った
そしてもちろん
魚と貝の臭気が籠る
さまざまな諸々の悲劇的事象の前に
野ざらしの地上の狭い通りのそこにだけ執拗に、まるで密室の中にいるかのよう
にも
いつもより騒がしい日だったに違いない
匂いがひたすら籠る
生きていたいの？
再利用の場違いな絵柄つきのビニールシートの取って付けの屋根が翳りを魚の目
の上にも落とした
そんなにまで
聲が立つ
両足がなくなってもう、たぶん何十年もたつのに
四方で女たちの聲が立つ
どうして？
ベトナムで市場には基本女しか来ない
何処かへ行って、ト殺して廻った戦争の？
匂いの中に聲は無防備なほどに、赤裸々に立つ
物乞いの老いた兵隊あがりの市場の午前
ひなたに立っていたわたしを振り向きざまにユエンが諫めた

うなだれて時に
陽の光の直射を咎めたのだった
見上げて
ここでは日差しは或は、破壊の象徴なのだ
笑みもせず憎しみも
事実、そうなのだろう
憎しみも侮蔑もしなかった
ある肌の敏感な日本人の五十代の女がサイゴンに来て、それを案内した時、あわ
ててさげんだ
大変よ。…ねえ
あくまで小声で、わたしにだけに
でしょ？…じゃない??
——大変よ。…ね大変よ
もうすぐ死ぬのよ
わたしは大きさに帽子と肌掛けに頭から防備する彼女を笑った
誰が?
——この日差し、大変よ。これ、大変なことになる
誰かが、死ぬんだ
その夜、事実女はホテルのベッドの上で顔と首を赤燻させ
どこかで
——熱があるの
大變…
女は甘えて云った
たいへんよ…もう
ここに来た一年目の11月、ちょうど南部は
いつもより騒がしい日だったに違いない
乾季のはじまりだった
いつもと同じ市場に
女の痩せた衰えをすでに知ってすでに馴染みもしていた額にわたしは
いつもに變らない雑然の
唇をつけてやった
雑踏、と。そう
女は私を追って、時節はずれのバカンスに来た
そういうべきもの。群がり立ち
女はそれからの、滞在予定の三日間を
叢迦利多地
ホテルにだけ、私と籠って
武良武羅伽利多知
過ごした。市場でこれ見よがしに私に聲を
聲。こゑ。——ひとの

立てたユエンのその大声が、私にその時を思い起させた
なぜ？
わたしはひとり笑んで、そしてマスクを直した。三十の時
飛斗乃
ホストをやめてからもその女だけは付きまとい続けた
飛止ゝ飛登止飛斗飛斗乃
その女もすでに、自分の老化と劣化とを知るように、私の老化と劣化をも又
聲。武良武羅伽利多津古恵能武良迦利爾
よく知っている筈だった
あなたは、...この肌
はじめて抱かれた男への固執だったのだろうか
此の肌、まさに鳩尾に流れ
それなりにアパレルでちいさいながらも名を立てた三十過ぎになって
おちる一粒の
今更に女を思った
汗
衰れみと共に？
いつもより騒がしかったに違いなかった
同じく老いさらばえた者の共感を含めて？
むらがる声がわたしの周囲に
自分への衰れみ、要するに糞忌々しい自己憐憫の一形式として？
わたし、そしてその僅か先に歩く
いずれにしても市場の通りの魚売り場の臭気と他人の聲の群れの中で、ユエンは

人ごみに怯え背中を小さくした
私をとがめて叫んだ
ユエンの周囲に
限りもなく容赦なく
さわらないでください
限りもない慈しみの心と
穢いから
自分の物を保護する過剰な防衛本能につきうごかされてただ
死にたくないから
正直素直に
呼吸なんかしないでください
わたしはユエンを見て、そして笑んで、そして思わず周囲を見回した
私の前で
その日町の飲食店はシャッターを半分しめた
むしろ、生きていなくてもいい
椅子を総てテーブルにあげた

今
テイク・アウトだけになった
わたしの目の前では
レ・ハンは
あなたはまさに穢くて
自宅待機になったに違いなかった

此の日、土曜日、ユエンは休みの筈だった。朝、一方的に自分が求め始めたのを、壬生自身が途中でやめて、そしてユエンは何も言わなかった。いつものように。不満を観じてあることをさらすことなく、且つ不満の存在を赤裸々にした。子供が欲しくないの？ そう云おうと思えば壬生の機嫌が翳ることを知っていたので、ユエンは敢えて云わず済ました。汗をながして寢室に戻った壬生にその時にユエンは云った。寢台に髪を梳かしながら。市場に行こうと。i ch と、そのベトナム語を壬生は解した。なぜ？ 壬生の問いに Cách ly xã hi 云ってユエンはその言葉をスマートホンのアプリに探した。寢臺に寝たまゝの妻のその手から奪ったスマートホンに壬生は社会隔離の文字を見た。字面から察して壬生は云った。ロックダウン。にほんご、ロックダウン。云って壬生はおかしくて笑って言い直した。にほんご、ろっくだうん。爾保无碁露津久陀宇无都市封鎖。又集團隔離。又戒嚴令？ ユエンは取り敢えずほゝ笑んでそしてナノ・ウイルスに改めて怯えた。ユエンは事の進行をスマートホンと会社のパソコンにインターネットで知った。壬生は櫛を取り、そして殊更に目を閉じてまるでまさに孀のような、そのユエンの髪を梳かしてかくて髑を以て頌して曰く

死んだ魚がその死んだ目に血をにじませる
わたしはその時に
その眼球の表面の浅い内に市場の雑な喧噪の中で、そして
振り返った。その背後に
夥しくいのちを繁殖させるのだった
泣き叫ぶ少女の聲が耳に
そのいたるところの夥しいところに
聞こえていたから。そして
その皮と肉と骨と
私の目は知った
内臓を脳と目までも喰いつくす
私の目は知った
ちいさなさまぎまのいのちのむれを
わたしの心に
死んだ豚が目をほじくり抜かれて顔だけをさらす
私の目は知った
その板のみづからの垂れたしみの上、むしられた鶏の丸裸のとなりに、そして
泣き叫んでいたのは少年だった。まだ
夥しくいのちを繁殖させるのだった
七、八歳の?...泣く

そのいたるところの夥しいところに
少年。泣き、泣き叫び
その皮と肉と骨と
泣く少年
内臓をまでも喰いつくす
母親にはぐれたに違いなかった
ちいさなさまざまのいのちのむれを
わたしは案じた
脳は別に捌かれて売られた
わたしは案じた
上手に蒸して喰われるだろう
何をしてやることもなく
目はすでにもう棄てられた
わたしは心に
どこかの癩棄の山の中に
わたしは案じた
それでもしずかに喰われるだろう
少年の歩む背後の遠くに
死んだ牛の赤身の肉が鐵の錨にぶら下がる
その女が怒号を上げた。ひとりのその
板の上には叩きおられた骨がへし折れ、その骨髓を無邪気にさらした。そして
肥えた女が
夥しくいのちを繁殖させるのだった
肉を震わせながら懸命に
そのいたるところの夥しいところに
女は走った。蟹股で、その人ごみの
その皮と肉と骨と
同じくマスクをした無差別な
内臓をまでも喰いつくす
顔と顔、そして顔と顔と、四肢と
ちいさなさまざまのいのちのむれを
胸と手と手と顔と顔、眼。…目。唇。その
脳は棄ててしまうのだろうか
それらの間を。すり足で走り、女は
それとも誰かが喰うのだろうか
少年に膝間吹くように、そして
どこかでちいさな細菌の群れが
振り向かせた須臾に頬を殴打した
そのかたちごとすべて喰いちらす前に
泣き叫ぶような眼差しのうちに

かくに聞き、壬生ダナンに住してユエンとその弟タンと俱なり又姉弟ふたりノ父コイと俱なり又姉弟に他に妹あり名はマイと曰シ之ノ人サイゴンに働き、又母親イェンはすでにユエン十二の時死にキ七月二十五日昼タンは外に遊に出き是レ常なり彼去年の暮れ前に旅行会社を辞めき観光バスの運轉手なりき以來無職なりきかくて朝遊出て夜にノみ帰り來たりき何處に遊ブかまいちるように壬生は知らず金錢殆どまいちるように持たざれば何をすともなし僅かなるまいちるようにまい知り会い又親族等の家廻りまいまいちるようにまい暇を貪る他すべなかりきタン大柄にまいちるようにおち肥え肥えて又肝ほそく壬生に知性もなく觀じられきユエンが二歳下ならばまいちるように齡二十八ならんコイ又朝遊出てまいちるように夜にノみ帰り來たりきユエンまいおちるように家にある時のミ晝飯時にノみ帰りテまいあがり二時間昼寝してスマートホンを弄ぶ之レ常なりコイがまいあがり齡六十半ばなりき仕事すでにわずかにのみまいあがりリタイアしつユエンのまいおち晝食の準備はまいおちて手間取りキ之レまいおち常なり此の日まいおちて殊更に買ひ込める食材が保存にちり追はれちり更にまいちり殊更なりきかくてまいちりようやく二時過ぎにまいちりまい調理に取り掛りて又待ツ間に壬生日本ノ友人に連絡ヲ入レタリ常ノ如一時まいちるそのはなのいろ歸宅したるコイはいろはしろすでに諦めずデに外に食事にテ出ツし彼親族が家廻りたるらんかくていろはしろ歸りテ昼寐に於地伎しろコイ大柄に肥え肥えて肥へ又肝ほそく壬生に知性もなく觀じられき又觀じられてタンと似タ親子那利岐壬生マイに數度のみ逢はき是レ旧正月になりかのそのはなのいろはなのいろはなにわにあるたいじゆにわにたいじゆはなをさかせてはな

ひとりでききはな

かげりにさくそのたいじゆみづからの

はの

かげりのなかにはなまさにしろく、何？ 此ノ花...

いつか壬生聞いてユエン答え、壬生知る、そのはな

さらのきはな沙羅

沙羅、

さら沙羅しろい、はなちり女神經細く無口なりユエンと同じくまいちり經理が担当ナリきタンの二歳下なりきユエンと壬生三時に遅い食事を取りきユエン殊更に今日ノ繁忙を歎き笑い騒ぎ壬生ユエンが爲にのみ笑ミきかの女何にでも手間取りきかくてそれに美豆迦良のみ氣ツかずかくてユエン常に誰より繁忙なりきユエンしらない。その

はなのにおいは未だ食しをはらぬに想わずに壬生ヲ正面に見觀つゞけて迦久互白して言さく眠きト迦久互此ノ人壬生を見てふたゝびに觀テ笑ミカケテ笑ミヲハラズゆゑに食シをはらずなにも片づをはらぬが儘にしらない。その

はなのにおいはソファに坐セル壬生が傍らに添ひ壬生にもたれかゝりて迦久互わざとに寢息を立てゝ目ハ閉じず薄くのみひらきゝ壬生ハ腕に抱きゝ壬生も又いまだ食しをはらざりき壬生寢室にしらない。その

はなのにおいは連レ行きゝユエンはみづから服を脱ぎて言さく暑きとかくて壬生添ひ寝せり迦久互ユエン壬生の上半身のみ脱がシテ縋り壬生フェイスブックのメッセンジャーに十九歳のレ・ハンの相手をせりユエンしらない。その

はなのにおいは未だ目をだに閉じず壬生耳にユエンの寢息をノみ聞きゝユエンが覺めた

る眼差シ寢室がすみ棄テ置カレ何ヲ見何を観ルともなくて壬生不意に鼻に汗ノ匂ひノ
薫れルを感じ思わずしらない。その
はなのにおいは片肘をたテた壬生はずりおちていまさらに壬生を見詰め返したるユエン
が素肌を疑ひきかくて頌して

あなたに話そう

その、うつくしい

まさにあなたの爲に話そう

うつくしいきものを

これは夢の話ではない

わたしはしっていた

あくまでの現実の話だ

かつて、いまも

あなたもまさに知るまさに現実の話だ

まさにわたしがしってるように

わたしはそれを鬩りと名づけた

かつて

十二歳の時に彼を失ったそのときから

わたしは彼をしっていた

その前から？

その

或いはその前からすでに？

うつくしいきもの

わたしにはそれは見えていた

ちせいのかけらさえかんじさせない

すくなくともそれは私にだけは

ばとうするようないきもの

それは、あるいは無数の、無さい限なまでに無数のそれらは、わたしには見えて
いた

うつくしいはだ

あざやかに

じゅうにさいのしょうねんの

鮮明に

もっとまえ

顯らかに

じゅういっさいのしょうねんの

隠しようもなく

うつくしいはなすじ

それら、いのちの群れ

じゅっさいのしょうねんの

わたしはそれを鬩りと名づけた

うつくしいまぶたのふるえ
肉の朽ちた、内と外の反対になったその形態
まつげのおののきのような
皮膚が骨を咬み、骨が皮膚をしゃぶったその形態
おびえのような
口と尻の肛門に自由に入出入りする眼球の節と足のある無数の行進
むなしくなるようなけはい
舌が伸びて空洞になった眼窩に脳髄の所在を探った。その聲
きゅうさいのしょうねんの
無数の聲
もっとまえ
割れた乳首が垂れた体液を空中に震わせた
はっさいの
声
おさななじみの
眼球に生えた産毛が叫んでいた
こころがこころづいたときには
極度の微弱音で
彼はそばにいた
聞き取れ無い程の聲のかさなりあった轟音を聞いた
かたわらに
臭った
わたしのかたわらを
それら肉の腐り始めもしない匂い
ふほうのうちにせんきよしてしまったように
あるいはそれは不死なのだろうか？
うつくしいきもの
死とかかわりあえるという傲慢な妄想になど捕らわれていなかったが故に？
ちせいのかげりなどなにもない
あるいはそれは永遠なのだろうか？
むりよくで
永遠がかけがえのない夢見られたあざやかな可能性だと、そんな妄想になど捕ら
われていなかったが故に？
かよわく
それらは咀嚼した
ひとりではいきてさえいけない
喰いきることもできないお互いを絡まり合いながら咀嚼した
きょうぼうないきもの
肛門から垂れる新しいそれら歯と擬態の歯ぐきにふたたび
なまえ

喰いちぎられながらもそれらは互いに

彼のなまえ

咀嚼した。それら、嘗て

わかひこ

死んだ、膨大なかつて死んだものたちのいのち

稚彦

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは死霊とでも？

おおつき

それら、嘗て生きた、膨大な生きたものたちのいのち

おうつき

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは死霊とでも？

淤宇津岐

それら、嘗て生まれた、膨大な生まれたものたちのいのち

おおつき、わかひこ

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは死霊とでも？

大津寄

それら、今まさに死んだ、膨大なまさに死んだものたちのいのち

おぼえていた

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは死霊とでも？

いまだに

それら、今まさに息遣う、膨大な息遣うものたちのいのち

かれのくちびるの

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは生霊とでも？

その、わたしのくちびるを

それら、嘗て生まれるべきだった、生まれなかった膨大な生まれなかったものたちのいのち

かみついてわらう

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

むじゃきなくちびる

それら、嘗て生きるべきだった、生きられなかった膨大な生きられなかったものたちのいのち

彼のくちびる、そして

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

そのはの

それら、嘗て死ぬべきだった、死ななかった膨大な死ななかったものたちのいのち

しょっかん

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未死霊とでも？

におい

それら、今生まれるべきだった、生まれなかった膨大な生まれなかったものたち

のいのち

くさい、とも

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

とはいえ

それら、今生きるべきだった、生きられなかった膨大な生きられなかったものたちのいのち

ほうこうともいえない

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

いきものたいたいの

それら、今死ぬべきだった、死ななかった膨大な死ななかったものたちのいのち

そなおなにおいを、あくまで

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未死霊とでも？

すなおにながしだした彼の

それら、やがて生まれるべき、いま生まれなかった膨大な生まれなかったものたちのいのち

くちのなかのにおい

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

彼とともにいきた

それら、やがて生きられるべき、生きられなかった膨大な生きられなかったものたちのいのち

たしかにわたしは

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

彼とともにいきた

それら、やがて死ぬべき、死ななかった膨大な死ななかったものたちのいのち

彼を

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未死霊とでも？

ころしてしまうまでのあいだに

それら、過去の、無際限の過去の、事象の自證した限りの生まれた膨大な生まれなかったものたちのいのち

あるいは

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは死霊とでも？

ころしてしまってからこそまさに

それら、現在の、可能性と現存の無際限の現在の、事象の裏側にも自證した事象の限りの

はじめてあいしたおとこだったにはちがない

それら、あまねく現在の生まれ生まれなかった膨大な生まれ生まれなかったものたちのいのち

その

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは生霊とでも？

うつくしいきもの

それら、未来の、無際限の未生の、事象の未生の未来の膨大なまだ生まれなかつたものたちのいのち

ちせいのかげりだにない

それを、それでも魂と名づけるべきだったのだろうか？あるいは未生霊とでも？

うつくしいだけにきもの

魂の群れが生き生きとした肉の色

じぶんでは

その色

いちにちたりといきのびれない

色と匂い。その匂い

むぼうびできょうぼうな

その色。匂いとかたち

かみつくいきもの

そのかたちと触感。ゆびさきの

むさぼるいきもの

頸筋の

しゃぶりつくいきもの

腹部の

いきをはくいきもの

尻の

わらういきもの

それの

めをむくいきもの

太ももの

においのするいきもの

つま先の

かみをかきむしるいきもの

髪の毛先の

くちをあけたいきもの

それら

はなをすするいきもの

ふれた。わたしは、見、匂い、嗅ぎ、ふれ、見て、そしてふれた

にげだすいきもの

指先にも

ちをながすいきもの

女の肌に始めてふれるまえにもすでに

あたまをわられるいきもの

ただ、無意味にも

しんでもなおくびをしめつづけられたいきもの

ユエンはかたわらに肌をさらして横たわった
しっकिनするいきもの
ただ、無意味にも
けいれんするいきもの
ユエンは暑いと、そういつて
はく
暑すぎると、ユエンは勝手にそう云つて
おうとする
肌をさらして寝息を立てた
淤宇登須琉伊岐毛乃
日が差した
ひかりのなかで
半分開かれたドアには日はささなかつた
じゅもくのかげりのなかで
光はさした
じゅもくのかげりの
気配もなくて
まさにそのひかりのなかで
壁の高いところに空いた通風孔の四角の十二の横並びに
そのはれたなつに
見ていた
あるいは
壁の薄いグリーンの色に今ふたたびにへし曲がつた脊髄に腸をのたうち咬ませた
雪菜のその翳りを
或いは冬なら
見ていた
例えばその如月の
その肛門の下に管を伸ばした唇の開いた空洞の垂れた血の玉が玉散る
岐佐羅岐乃由岐乃宇知那良
その赤い浮遊の丸の戯れを
降る雪の中に
——愛すます
その色
と
老いさらばえた私の腐つた匂いに捧げてレ・ハンが送つた日本語を讀んだ
飽く迄も冴えた
——愛しています
白の中に
と
稚彦の血が飛び散つたのなら

ハンの日本語の、そのかろうじて成立したフォントを私の目は追う
その雪が
かろうじて今を維持した私の網膜が
あしろむきに倒れた彼の
かろうじて今を維持したその細胞の組織が
残した躰の
かろうじて今を維持した私の眼球が
残りの温度を奪い去る儘、或いは
かろうじて今を維持したその細胞の組織が
雨の
かろうじて今を維持した私の脳組織がそれをふたたびどこかに構築する
降りしきる雨の
かろうじて今を維持したその細胞の組織が
その明け方なら
かろうじて今を維持した私の意識のどかしらに
もはや血など
かろうじて今を維持したその作用の総体が
もはや流れ出しているようにも思えなかった。その
かろうじて今を維持した肺が息遣った
すさまじい豪雨が
かろうじて今を維持したその細胞の組織が
その響く
かろうじて今を維持したその作用の総体が
轟音のむこうで
いつか流入したいいくつかのかろうじて息遣った新型コロナをかろうじて屠殺した
免疫の下に
夥しい血をあふれさせて
——愛します
死にかけたはずの稚彦を
わたしは送った
血の匂いさえなく
それは日本語の訂正だったのだろうか？
ただ濡らしていた。洗い流す？
それは愛の応対だったのだろうか？
...まさか
かならずしもどちらでもよかった
ただ壊す
美しいものは愛されなければならなければならない
ひたすらな暴力で
結果、破壊と無惨をしか生じなくとも

ただ破壊をだけ企んだように
美しいもの以外は捨て置かねばならない
散る飛沫は
美しいもの以外は辱められなければならない
たしかに匂った
美しいもの以外に生きていく価値も権利も義務も無い
慥かに匂い
誰もが認めた
匂いたち
醜いものを
散る飛沫は
ふためと見れない醜いものを
騒ぎ立つ
赦すために彼等は云った
空間の四維を
あなたは本当は美しいと
埋め尽くしても猶
だれでも本当は美しいと
匂い立つ
故に彼等は残酷に断じた
もはやすべてを
美しいもの以外に生きていく価値も権利も義務も無いのだと

寝台にユエンを、壬生はなかば抱きかかえるようにさえして導いたあとで、なにも云わずに自分の服をのみ脱ぎ捨てたユエンを放置した。先に蚊帳をくぐって自分でだけ身を横たえ、壬生は目を閉じた。ユエンは美しいとは言えなかった。壬生はそう思った。誰もが美しいと云った。ベトナム人も、日本人も。時にはまるで陰湿な冗談のように。或いは素直な羨望として。或いは明らかなふたりそのものに向けた嫉妬を兆させ。或はかゝわりあうべからざる他人と知って軽蔑したように。或は憎しみをのみ隠し隠し切ろうともせず。あわせて壬生の老いさらばえていまだに榮えた美しさをも讃えながら、時にはまるで陰湿な冗談のように。或いは素直な羨望として。或いは明らかなふたりそのものに向けた嫉妬を兆させ。或はかゝわりあうべからざる他人と知って軽蔑したように。或は憎しみをのみ隠し隠し切ろうともせず。閉じた眼差しのうちにユエンが壬生の T シャツのみ脱がすのを知った。壬生は抗わなかった。又随いもしなかった。だからユエンはひとりで彼を脱がせた。そしてひとりで彼に添い、身をあずけ、そして母親のそれにするように、ユエンは彼の乳首を吸った。壬生は瞼を閉じた儘まばたく。かくて偲を以て頌して曰く

蝶を見ていた
ふらふらと、ふらっと
その時に
ふらふらと、ふらふらと

翳りの腸の垂れてのたうつその上に

音さえも無く

紛れ込んだ蝶のその色彩は

音の

たぶん右の四番目の

気配さえ無く

通風孔から入り込んだ

そして沈黙も

蝶が舞った

沈黙さえも

たぶん出られはしないだろう

その気配さえ無く

迷い込んだ空間からは

ふらふらと

なぜ飛ぶのだろう？

ふらふらと

本質的な

ふららと

その習性の陥穽に

色彩が舞い

はまる危険をまき散らしながら

色は憩う

かくに聞き、壬生はかくて遠く壁伊久津迦隔てたる向かふにユエンの汗を流す音をかすかにのみ聞き、夜ふけはじめて九時その夜壬生ユエンをユエンの爲にのみ抱き、指先にのみかたちヲなづり残すところもなくなづり限なくなづりユエン盈ち足ることなしユエン観じてたゞ不可解なりき何故にその日本人ノ子供をつくらんとせざるカ不可解なりきいつでも途中でやめて餓えるともなく又きいたのだ棄つることもなきをユエン或いはきいたのだすでに知りきそのきいたのだ男臆病なる夜羅无ユエンはすでにきいたのだった、そのこゑ

だれの？

知りき或いは男ユエンが躬に満ち足りざる夜羅无とかくてきいたのだユエンあお向けたる儘壬生が爲にのみ股ひらき、ひらき殊更にひらきさらし殊更にさらして彼のきいたのだ戯れやすきにかくてきいたのだ軀半分のみ覆ひかぶさりたる壬生ノくちびるを見てきいたのだった、そのいぶき

わたしの？

間近く右ノ中指に撫ぜたり人差し指と薬指あやふく触れナントす距離にかすめ迦久て迦ス迦にふるえ今度は生き残れるのだろうか？ ユエン想ひき三月四月のコロナ騒ぎには無傷だった。ユエン思ひ想ひき。ベトナムは優秀な成績を取めた。…誰の目にも。ユエン思ひき。…誰の、たとえ日本の差別主義者の目の中にさえも？ ユエン思ひ想ひき。…だれも死にはしなかった。たゞ偉大なる G7 の先進国の方が無様で自分勝手な壊滅をさら

した。ユエン想ひき。...翻訳のインターネットに見た日本人が成功を誇っているらしいのは、それは文化的な思考様式の違いにすぎない。ユエン思ひ想ひき。せめてそう憶測しななければならない。無惨な無数の死穢の膨大をさらすかの国に、かの國にまさに固有の、かの国にだけまさに固有の。ユエン思ひ想ひて指先に飽きて壬生ややありて汗をながシに行きゝわずかのきいたのだ汗の流れたることも無きかくてきいたのだバイクを三臺止めたる夜間なる居間のきいたのだバイクの騒りに音ありき是れいきものゝきいたのだった、そのさけびさえ

かれらの？

口のすゝり上げたる音なりきコイがコイのフルーツを貪りきく喰ひ食ひ貪りてゐるに違いなくてきく又事実かくなりコイきくすでに家族のだれにも見放されきコイきく誰にも媚びて卑屈にしてきく臆病にして尊大なりて僻みてきく貪婪なりて能力なくてきく

聞き

きく。——聞いた、財産もなく親族の讒言謗言悪口僻口頻りにしてきく頻繁にしてすでに息子娘らにも及べりコイを憐れみ家族をきく諫めるやさしき外縁のきく翁もみづからでコイを内に引き入れんとはせざりきスマートホンにきく

いつでも他人の——聞く

たにんのこゑを聞き録音したる自分のカラオケの歌ひぎ元にのみひとり響かせき盛んなりきコイはきくみづからが歌声に戀せりみづからきく聞くをきき

声を、まるで、じぶんのさえ他人のそのようき

聞き愛しき音程さだまらず聲質轟き糖尿病わずらひたるコイすでにシテ視力ノ半分及び聴力ノ半分及び左手の筋力ノ半分近く失ひ及び時に理性を失ひ時に殊更に唐突にも怒り騒ぐを得き又尿結石患い薬剤に尿を垂れながしさいごのこゑさえ？ 襦袢はなさず體に善きと誰ものさいごのこゑさえ？ 云ひけるフルーツの糖分に過剰にもさいごのこゑさえ？ 飢え貪りき毎朝毎昼毎夕方毎深夜と果物喰ひはさいごのこゑさえ？

わたしの、さいごのこゑさえ

聞きコイの日課なりき是れ殊更に愛してスイカとバナナを偏食セリ壬生はひとり汗ヲ流シきかくて頌して

あなたに話そう

知ってる?...もうすぐ

まさにあなたの爲に話そう

あなたは死ぬんだよ、知ってる？

コイの住む家はユエンの家だった

あなたはもうすぐ

ユエンの住む家はコイの家ではなかった

知ってた？ たぶん誰も

それはイエンの家だった

一時の感傷以上には

イエンが貨物トラックに飛び出して死んでからそれはユエンの物になった

流す涙さえもたなかった形通りの葬祭の

むかしイエンは妹のチャンと一緒に住んでいた

どこかしらなげやりな気配の内に
ハン河の近くのその広大な庭の家に
知ってる？
チャンの娘のティエンとリンとニーは結婚してもう家にはいなかった
あなたはひとりで死ぬんだよ
チャンの長女のタオは相変わらず家にいた
その
ティエンとリンとニーはユエンと土地の所有権で争いはじめた
貪るスイカの尽きないうちに
イエンとチャンの権利は本来等分のはずだと
地上にはまだ
コイは譲らなかった
貪り盡せない
仕事を無能なコイはタンにはさせなかった
スイカの果肉と果汁を
マイにもユエンにも
したたりのこした儘でひとりで
自分がひとりですと云って聞かなかった
あなたは死んで仕舞ったんだよ
その交渉だけで三か月費やした
知ってた？
だれも彼がまともに事をなしとげるとは思わなかった
もうすぐ死ぬあなたは
最初にタンが匙を投げた
知ってた？
マイは最初からかかわらなかった
生きながらすでに死んでいたようなもの
タンが匙を投げたときにユエンも結局は莫迦馬鹿しくなった
あなたが生きた価値はなかった
コイは膨大な書類を準備した
知ってる？
その書類の整理が彼の趣味だった
何も無かった
毎日書類を整理して目を通した
あなたが生きた意味はなかった
毎日細かな部分を修正した
なにも無かった
週に三度は友達のところへ書類を持参し、コーヒーかビール片手に騒いで回った

變りはなかった

一か月に一度くらいは役所に行った
生まれなくても
弁護士の知り合い相などもとからいなかった
知ってる？
友達で紹介した法律家は頼にした
死んだら？
彼はコイにあなたには何の権限も無いと云った
すれちがいざまに
娘の代理人として立たなければならない
コイはあげた、顔を、——不意に我に返って
土地はコイにとってはコイのものだった
ひとりでその歪にふくれた顔を
週に一度は電気工事のバイトに出かけた
どうしてそんなにふくらんだの？
知り合いが聲を懸けるのだった
どうしてそんなにはじけそうなの？
彼の手数料は安かったから
なにも云わなかった
もとは電気の技師だった
すれ違いざまに
毎日ビールをただ2本だけ飲んだ
果肉をすすする唇を止めた
ほんのわずかの口を湿らせるほどの分量を盛大な息と満足で飲み干した
寶物のスイカの果肉は
女ならだれでも愛想を振った
タッパーに綺麗に切って並べた
だれにも厭われながら、彼が靡かない女は十六歳以下と年上の女だけだった
自分が買ったタッパーで在る筈がない
毎日ダンスに行った
ユエンが...わたしが？
壁際に立った女に手を差し出しては拒絶されて舌打ちした
いつか買って忘れていたもの
時に顔をあわせたティエンとその家族に、リンとその家族に、ニーとその家族に
女たちのいきり立った箒で追われた
かすめるように生きて来た
誰もがイエンが死に、チャンの夫が死んだ十五年前にコイがチャンと関係したこ
とは知っていた
いつでも
一か月で別れた後でチャンがコイの無能を詰って回ったから
だれかの忘れただれかのものを

コイが土地問題に着手して三年が立った
かすめるように生きて来た
誰もが死ぬまでその儘だと知っていた
自分で手にしたものは無い
彼が負けて仕舞わない限りは
かすめるように生きて来た
たぶんこれから彼は毎日家に籠ってるだろうとわたしは思った
むかしの戦場でも？
前の時もそうだった
かすめるように生き残った
先の三月と四月に、空港の検査で発見されて終わっていた比にも彼はほぼ一歩も
出なかった
かすめるように匍匐したから
だれも死んではいない儘に、全国で百人以下の状態の時に、この国は国をロック・
ダウンした
かすめるように人を殺した
7月のコロナは市内感染なのだと云った
かすめるように息遣い
ユエンが
引き金を忘れて逃げ惑う
そしてゴックも
かすめるようにいつか死ぬ
経路もなにもわからない儘だと
かすめるようにすでに死ぬ
或はようやく始まるのかも知れなかった
かすめるように、あなたはすでに、——と
様々なデマが様々な経緯で飛び始めるころだった
死んでいるに変わらない、——と
善意の、そして正義感ある常識外れの専門外意見をも添えて
その耳元でその耳に
人のすることのバリエーションなどたかが知れている
さゝやいてやろうと思った
どの国でも
いつでも盛んに殊更に音をたてて喰う
コイはフルーツを買いに行く以外には一歩も内から出ないに違いない
その唇のかたわらの耳
毎日に四度太るだけ太った巨体に巨大な毛無しのバグのような顔を載せて
ふくらまない耳に
スイカとみかんとバナナと健康の爲の漢方茶を買いに行く以外には
わたしの笑みを

彼は誰よりも自分自身を熱狂的に愛した

コイは見ていた

壬生はその体にシャワーの冷水のながれるのを見た。散る飛沫を見、その音、自分の周囲にだけ響く水のざわめいた音を聞きかたくて儂を以て頷して曰く

あなたは美しいと誰も云った

水滴が撥ねた

いまゝさに今も猶もあなたは美しいと

鏡に映った素肌の

ひそかに隠れて匂いを嗅いだ

その滅びかけの老残の

たぶん

飛沫が散った

だれもがだれかに

肌もかたちも骨さえも

体の匂いについて噂したから

血さえもはびこる遺伝子さえも

聲をさえひそめもしないで

すでに滅びかけて老いた

羞じらうことなく素直に

手遅れの醜さをだけさらし

あまりに素直な目をさらして

水滴が撥ねた

赤裸ゝな、例外的に素直な目を

わたしは見つめたその見苦しい

だれもがわたしに焦がれるものだと思った

肉の塊の滅びの姿に過ぎないものを

あるいは暗い嫌悪をもやして

飛沫が散った

だれよりもくらい目をした少年を知っていた

わたしは見ていた

だれよりもくらい目をした少年を愛した

絶望も無く

だれよりもくらい目をした少年は私を抱いた

玉散った

かくに聞きゝ夫レ7月26日その日ハ日曜日なりき朝起きてユエン朝食をみづから作りきユエン壬生と俱なりて食せり後ユエン祖父の家にはひとり詣ヅ之レみづからのスクーターを以てス壬生思ひきユエンひとりその家ノ前に彼女のバイクを止めたル時ヲを見てレ・ハン氣落ちシテ亦甚だシからんとかクテレ・ハンハメッセージをよこさゞりきレ・ヴァン・クアンハその家に死にかけテをりタリキタンハにわにバイクで何處かににわに遊び行きゝ彼にわに居間に壬生ヲ見目あヒかけてあはてゝ目をにわにそらし無言もてバイク

を出しきコイはにわに如常フルーツと朝食を済ましたる後ににわに息子と共有なる自室
ににわに戻りき壬生にわに

そのじゅもくのいくつかのたかいところに

むらがるとりのはねの

そのおとをその儘ソファに横たわり身を横たわへてかくて午前十時に横たはりたる儘ス
マートホンにインターネットを見て見観て観るに日本に Covid19 ふたゝびの激しきカー
ブを描きてふたゝびの榮へを兆しをりき見て壬生思ひき前と同じ曲線を描くに違いな
い...かくに思ひて前日の新規感染は 700 人を超えた。約 1 億 2000 に膨大な外国人労働
者加え、と、かくてかくに思ひて更に膨大な留学生をあわせて、その総計分の 700 プラ
ス未発見の患者等潜在的可能性を加えた数、と、かくてかくに思ひて...その割合を、多
いとみなすべきなのかどうか。俺には、と、かくてかくに思ひてわからない。俺には、
と、かくて日本の藤井幸二郎に Line でメッセージを送りき後に彼と通話せりかくて十二
を過ぎゝ過ぎて未だユエンは歸って來ざりき庭に夕オが叫きたる聲聞きて壬生ひとりな
りきかくて頷して曰く

あなたに話そう

直視した眼差しに言った

まさにあなたの爲に話そう

言葉には決して出さない儘に

ユエンは 30 歳だった

あなたは

5 年前に私と結婚した

あなたはわたしと結ばれなければならない

あまりにも自然にわたしを結婚に導いた

その夏

わたしは彼女を愛しただろうか？

五年前に

或はほかの女を愛しただろうか？

十一月

他の女を愛したようには彼女を愛した

この土地の夏

雪菜のようにも

わたしは思った

それは事実だった

かの女の無防備な確信を

そして稚彦のように愛さなかった

実現して遣る事を

或いはゴック・アインのようにも

むしろ

それも事実だった

何か思っても見なかった僥倖のようにも

ユエンは小柄で眼鏡をかけた
わたしは思った。かの女の
大きな目でそして理知的なふりをした
確信はあるいは
自分でも理知的だと信じていた
狂気じみてさえ見えた。赤裸々に
だからあくまで容易かった
かの女の目はわたしを
獣じみた衝動のユエンは理知の人そのものだった
自分の夫としてのみすでに
最初やせぎすで哀れむほどだった
見ていた。その女
一年の度に肉を富ませた
ユエンという名の
男を知ったからなのだろうか
経理担当の瘦せた
理知的なユエンはわたし以外には知らなかった
褐色の女は
その日十二時に歸ってきたユエンはシャッターの隙間から入ってきて、逆光に
海外出店のコンサル
大げさに両手を広げた
ある個人事業主の、飲食店海外出店
甘えるだけ甘えた聲に私に詫びた
自動車小物販売店の
昼食に遅れ準備もしない不貞の妻の不貞を詫びた
二代目の素人じみたその海外投資に
わたしとユエン自身だけに、戯れようとするかのように
わたしは買われた
容赦もなく
二代目の事業は失敗するに違いなかった
押し広げられた手が私にふれる寸前に
その他多くの事業主と同じく
ユエンは大げさに歎きの聲を立てた
滅びゆく
ユエンは私を激しく拒絶した
その人種
ふれないで
あきらかに劣化し
指いっぽんわたしにだけは触れないで
滅びゆく多くのその種族の常として

何故？

彼は思っていた

穢れているから

日本は無条件に優れた国なのだと

外のウイルスの自由な跳躍に、乃至はその

それは無条件に尊敬さるべき國で

好き放題の繁殖に

事実尊敬され

外の人たちの穢い指先のふれたもの

それは無条件に愛さるべき人たちの國で

穢い唇のふれたもの

事実だれにも愛され

穢い息のかかったもの

それは無条件に羨望さるべき國で

それらに知らずに触れた穢れに

後進国は彼等を羨望する

シャワーを浴びる。...と。妻は

わたしたちを、...と、

ベトナム語でそう云った。バスルームに消える前に

彼等はそう思った

英語でもう一度

わたしたちは、あまねく

シャワーを浴びる。...と。妻は

下等な生き物たちの憧れで、そして

そう云った

羨望されている、...と

最後に私に顔を見せて

彼等は

私にだけささやいた。あびますと

滅びながら

あ、び、

劣化し

彼女は

壊滅していきながら

あ。...び、いまっ

そう思った

幸せだった

海に囲まれた

彼女は幸せでなければならなかった

かならずしも狭いとも言い切れない

なぜなから彼女は自分が幸せだと知っていたからだった
中途半端な島のつらなりに繁殖して
だから彼女は事実幸せだった。だからわたしは
ユエンは見つめた
ソファに座ってパソコンを見た
わたしだけを
シャワーの音は聞こえなかった
かすめとるように
タオの怒号が壁の向こうにわなないた
音もたてずに
しかりつけるチャンは居なかった
かすめとって自らの
だから彼女は自由だった
口の奥でだけ
体を拭くだけ拭いて、何も着ないユエンが私の膝に
咀嚼するかのように
すわった。無理やりに尻と背中で腕をのかせて
わたしを見つめた
ユエンはすでに知っていた
五年前の夏
ユエンの家にコイは居なかった。すくなくとも今は
サイゴンの乾季に
ユエンの家にタンは居なかった。すくなくとも今は
空気が乾く
だから彼女は自由だった
ひたすらに
理知的な淫らな甘えを私にさらせた
わたしたちの周囲に
彼女は幸せだった
雨に、その息吹きにさえふれない大気は
彼女は幸せでなければならなかった
乾ききった
なぜなから彼女は自分が幸せだと知っていたからだった
かすめとるように
だから
かの女を？
彼女は事実幸せだった。だから
かすめとるように
腕に彼女をあやしながらわたしは思った
わたし自身を？

美貌のタオを

ささやいた。その

庭の方に叫び聲を立てたタオを

耳元に、――

時にはその肉体を

Anh bit

肌に纏う芳香を

em yêu anh

洗練された冴えた香水に砂糖をぶちまけて台無しにしたよ
うな、その

生々しく息づいた

Anh bit ri

昼に近くなった。十一時を廻った。それはすでに知っていた。新型コロナを厭うた譯でも無かった。にも拘わらず壬生はその日何處に行く気にも成れなかった。何をする気にも成れなかった。ユエンを抱いてやるのさえ億劫に感じた。むしろ歸って来なければいゝと壬生は思った。ソファの上に目を閉じた。あお向けた儘の閉じられた瞼に赤とオレンジにちかい光の残像が透けて見えた。壬生はそれを見るときもなかに見た。それを目に見ているというべきなのか否か、壬生は判断しかねた。色が翳った。傍らに人の氣配があったことは知っていた。目を開けた。タオだった。その珍しく結われなかった髪が、覗き込み、長く伸びたその儘に垂れて壬生の顔を覆った。タオほどに気高く美しい顔を壬生は知らなかった。さらし放題の肌の褐色は寧ろその肌に匂い立つ固有の色彩として彼女をだけ彩色した。目の片方だけ黒目が赤かった。壬生は理由を知らない。その色が目に時に、その目を見詰めた眼に何故か痛みを走らせた。タオは目を剥いて笑っていた。いきなりに、それは無惨な迄に容赦のない笑みだった。口を大きく明けて白目を一瞬だけ剥いた。口は広げた儘だった。笑った事実さえすでに忘れ、かたちは大きく広がった儘に口の中が無造作黒かった。あまりに自然な、ちいさな狭い光の翳り。唾液が顔に垂れた。臭った。内臓の腐ったような。当分齒など洗っていないに違いなかった。タオはのけぞるように上半身を、跳ね起きるようにのけぞらせると、そして叫んだ。ベトナム語だった。纏うた白いパーティ・ドレスが裂けそうに伸びた。その豊かな女の体のかたちに。寝間着のピンクのだぶついた薄いパンツの上に、妹たちの誰かのお古に違いないパーティドレスを、タオは着ていた。あまりに小さすぎた。肉の豊満を淫蕩なまでに讃えたからだには、そして布地はち切れそうな無理を曝し続けた。壬生はタオの爲に息苦しさをのみ感じた。二の腕は着込んだ男物の防寒着が隠した。タオは再び背筋を反り返らせて何か叫んだ。右のかすか上の方を見て、何を云っているのか壬生には判らなかった。ベトナム語だった。彼女は長い大声のベトナム語で何かを嘲っていた。目に野蠻な色が萌した。事実野蠻に見えた。或いはタオは訴えていた。或いは拒否していた。或いは侮辱していた。或は嘲弄し、或いは罵倒していた。むしろ或は懇願していた。或いは嘆いていたのだった。或は讃えてさえいたのだった。或いは、彼女にそれらに本質的な差異など無かったのかもしれない。そして或いは、それらすべての混淆した複雑を、彼女の想いはまさに彼女に体现していたのかもしれない。壬生は部屋から顔をすこしだして、コイがうかがっているのに気付いた。かすめとるように。コイはすぐにひっこめた。かすめと

るように。ドアを閉め鍵をかけた。かすめとるように、壬生は、そしてコイはいつもそうだった。頸を突っ込みかける前にはまっさきに逃げた。壬生は身を起こした。すれすれにタオの肌が匂った。エレガントでノーブル過ぎた香水に砂糖をぶちまけて、汗の匂いに媚薬の効果を期待したような。タオがめくりあげたドレスのスカートで顔を拭いた。さらされた乳房には気づかなかった。タオが再び壬生に叫んだ。気付かれない儘乳房が揺れた。タオは満足した。言い切ったのだった。背を向けなくて奥に歩いた。蟹股で、床に踵を擦り付けるように歩いた。見つめたタオの目が、黒も赫もともに壬生を愚弄した。奥の翳りに入った時に、すでに壬生をわすれたタオはあまりに自然に右に歩いた。蟹股で、猫背の儘にのけぞったように背を伸ばして歩き、その先はタオがひとりで住んでいる区画だった。もとチャンとその娘たちが相部屋を複雑に重ねて住んでいた。チャンはティエンの家の新築と同時に引き取られた。ティエンの四人の子供の最後が、タオと同じ症状を曝しているのに気づかれた三歳の一年前に、タオはティエンに忌まれた。チャンは毎日バイクに載せられて、残した娘の世話に來た。ほんの三時間程度。タオの生活区域は荒れた。鼠と俱にタオは生きた。一日分まとめた食糧をタオは好きな時に食べた。好きな時に寝た。タオは彼女の区域の女王だった。タオはチャンの最初の子だった。妹たちの誰にも姉を引き取る気はなかった。壬生は、壁の影に姿を消したタオに随った。タオはもはや壬生を振り返りもしなかった。仏間を通して裏の庭に出た。つけっぱなしの電飾のせいで、まさに人工の莊嚴をさらした仏間に物音がした。鼠が駆けたに違いなかった。だれでも、——その鼠の目は、

だれでも他なる生き物を弑殺者の侵入として見出す。

彼固有のものであるべき領土の中への。

タオの区域は裏とは言え、通りにはそのまま面していた。もとはこちらの方が表通りだったのかもしれない。庭の向こうに何かの廟が見えた。樹木に翳る庭の真ん中に出てタオは日差しを浴びた。白いのパーティードレスを引き上げて尻を出した。壬生が羞じて、眼を逸らしそうになったほどにそれはひとり、色めいてなまめいた。壬生はタオをだけ見ている。木漏れ日がまだらにタオにふれた。タオはしゃがみかけると、しゃがみきらない儘にそこに放尿した。チャンが居たなら罵倒するに違いなかった。妹たちなら折檻するかもしれない。誰よりもタオは煽情的なまでに美しかった。タオの体はまさに男の夢の女だった。かくて偽を以て頌して曰く

いくつもの明白な差異がある

　　告げよう、そっと

蝶と蝶の落とす翳には

　　だれに？ あるいは

恐ろしいほどの明白な差異がある

　　だれかに。わたしではない

飛ぶ蝶と飛びたつ前の蝶には

　　だれかに？ あるいは

際立った明白な差異がある

　　告げよう、だれかに

蝶の羽根と蝶の足には

だれに？
まがいようのない明白な差異がある
指先がふれる
傾く蝶の翅の傾斜と一、二歩這う蝶の触覚の角度には
そのまえにゆびさきは
それらの差異をつぶさに見た
ふれようとした
タオはひとりで
じぶんにふれた
さまざまな声と音響と
ふれられもしない
タオはもはやひとりでさえもなく
そのままに
さまざまな色とかたちと俱に
ふれあいを擬態して
タオはかろうじてひとりで
ふれられないままに
さまざまな息吹きとその残像の兆しと
眼差しは見た。その
かろうじてタオはその
指先のわずかな向こうに
固有性を維持したのを知り
飛び立つ蝶を
その羽搏きの揺れを

かくに聞き、かくてユエン歸り來タル後殊更に詫びて媚びたる後壬生と俱なる昼食の後ひとり寝き昼寐ベトナム人の常ナルがゆゑなり此ノ國に人と人、オフィスならば床に御座を敷きて寝又此の國に人と人、工場な羅ば床に段ボールを敷いて寝又此の國に人と人、家ならば当然に家のどこかしらに寝て嘗て壬生サイゴンの路上にバイク・タクシーのバイクの上に寝るを見き壬生は添ひ寝せざりき居間にアリテ壁の向かふにタオが怒號の騒ぐ儘に耳に聞き、かくて壬生思ひて…蝶にでも？

雀に

鳩に？

鳥にでも？

タオは叫んでいるのかも知れない。たとえば、十年前の明日の天気曇りの日の、火星の空に雪が降る奇蹟的現象の可能性について。

かくて壬生外に出でり故にユエンの家には眠れるユエンと眠れるコイと醒めたるタオが残りき壬生外に出てどこに行ク宛てもなかりき右手なる車道が向かふに河に日差しは照りき照り映え映えて照り溼る河白くきらめかき光り騒ぎてみづから白濁せり壬生小道に折れき壬生見て目に道に道なりノ店の開閉店乃状況を追ひき知りたる喫茶店の前を通りかゝりき厥レ女三人で經營しをりきその女のひとりを壬生は知りき通りがゝりにその女

にのみ笑みきかかてその他の女にも笑みきひとりの女壬生を見て歓喜し女殊更にも笑みて女ベトナム語しか話せざりきゆゑに背後なる店を指に差しき店大掃除途中にてムしろ雑然たりかくて女腕にバツ印を作りき明日から閉めると云へるに壬生解しきかかて事実異ならずかかて頷して

あなたに話そう

かくすすべもなく？

まさにあなたの爲に話そう

かくす氣もなく？

ここではコーヒーはアイス・コーヒーに決まっている

かくす必要さえ感じずに

ロックグラスに砂糖をたっぷり落とす

ミーはわたしをまっすぐに見る、いつも

淹れ置きのコヒーをそそぐ

正面から

かき混ぜる

まるで、そこに

水を落とす

わたしとミー以外には

冷やしたお茶を添える

存在さえしていなかったように

お茶に砂糖は入れない

知ってる

お茶の金色は氷の溶かした眞水の渦をしずかに巻く

あなたは知ってる

上に

わたしがあなたを愛していることは

下に

わたしは知ってる

右に

わたしがあなたを愛していることは

左に

わたしがミーを

あるいは四維に

愛しているのかどうか、その問題は

立方体の広がりやの儘にそれらの巻き亂れる可能性のうちに巻く

ミーの眼差しには存在しない

時に行く度にミーは目配せさえしなかった

長い髪がひっ詰められて

瞳孔の開いた眼でわたしを見た

後ろで肩に撥ねる

隠すということはなかった
かすかに女たちに
だからひけらかす必要もなかった
肌の汗ばんだ匂いがした
主張もない素直さの儘に
日差しは慥かに
ミーは瞳孔を開いた
彼女たちを店の
その眼差しのなかにわたしを見た
日影の中に
ミーはすべてを知っていた
蒸す
わたしの住んでいる場所も
ミーの眼差しは
わたしの俱に住んでいるひとたちも
瞬きさえしないように見えた
わたしの毎日のくさぐさのあらましも
わたしを見るときには
狭い親しい町だった
いつもなら
客の誰もが美人のミーに媚びたから、ミーは耳にわたしの話を知っていた
昼下がりにも店は
なにを求めているのか定かではなかった
男たちで混雑した
ミーはわたしを自分のものにしようという気もないのだった
未婚の、既婚の男たちで
ミーは悪い女ではなかった
博打をする譯でも無く
そして自分が悪い女ではないことを知っていた
殊更に騒いだ雑然をさらすわけでもなく
だからわたしを自分のものにしようという気もないのだった
ミーの爲に
ミーはひたすら瞳孔のひらいた目で見た
殊更に家畜じみた
その目の色は知っている
従順な紳士をさらして
多くの女がわたしにさらした
だれもが猫背で
多くの男はさらさなかった
自分のスマートホンを見た

愛しするというかたちはおそらく男と女ではちがうのだ
誰もほとんど聲をださずに
それが身体的な要因なのか所謂精神的な要因なのか
その日影に群れて
精神の本能的なプログラムのあらわれなのかその性格に歸すべきなのか
うづくまるよにミーに添うた
しらずに強制されるものかあくまで能動的なものか
ミー以外のふたりの女は
わたしには判らない
丸いちいさな体で息遣う
男は冴えた見つめる眼差しをさらす
男たちの目の
女は臍ろに瞳孔をひらく
自分たちにはふれないで
おなじく、私を鮮明に見つめる
ミーにさえふれない伏し目の気配の
彼等の、彼女等の眼はそのそれぞれのいろとかたちにあざやかに見い出す
なまめいた匂いの筋に
ミーが聲を立てて笑った
ぶつかりながらふたりは
不織綿マスクはその表情をは視覚にかくした
日影に生きた
そのほゝ笑みを気配させた
その日影は涼しかった
通り過ぎかける私の、彼女をだけかえり見た眼にミーのくちびるが気配に兆した

通りの向こうに高校の
不織綿マスクの向こうに唇は何か言いかけた
グラウンドが見えて草を茂らせ
すくなくとも一か月か二か月の別れを告げたように思った
いま
ミーの瞳孔の開いた目が私を見た
だれの姿もなかった
ミーはわたしのためにマスクをおろした
だれの聲も
ミーの瞳孔の開いた眼のしたに、彼女の頬と唇は笑んでいた
もはや響かなかった
わたしは彼女の爲にだけ笑んだ
ミーが
ずれあがるマスクの触感が頬に違和感を与えた

そしてわたしの爲にだけ笑い
街路樹の上に蟬が啼いた

ふたりの女の、そのひとりが

ミーの店に客はいなかった。営業していなかったのだった。女たちは当分の間放置する店の当座の片付けをしていた。二度目だった。三月と四月もそうだった。女たちの唇にだけ、女たちの笑い聲がたった。ミーだけ、すれ違う最後まで壬生を見ていた。目配せなどしなかった。そのままに正面に壬生を見て、ミーは素直に笑んだ。笑い聲のないのを惟しむほどに、それは完璧な笑みだった。壬生はそう思った。壬生は女に笑んだ。ミーの目の前を通り過ぎ、壬生はユエンの祖父の家で犬をあやした。レ・ティ・カンの家族たち、...その娘たちは家で氷を売っていた。離婚して戻った太ったヒエン、そして一度も結婚しなかった太ったタムが、いつも店前に番をした。レ・ティ・カンは姿を顕さなかった。九十を超えていた。その日、レ・ヴァン・クアンを見舞わなかった。レ・ハンは敢えて壬生に距離を保った。まるでその男、壬生など知りもしないかのように。肌がふれあいそうなほどの傍らに座り込んで。かくて偈を以て頌して曰く

路面は白く光るのだった

ゆがんだ指が樹木の肌に

日の光にさされていまや

つきさされて更に

アスファルトはただ白いきらめきに染まって消し去る

歪んだ頭部を内側に曲げた

その色を

その死者たち

翳りかけた日は光りの傾斜の

翳る翳りの死者と未だ

角度の儘に煌めくべき

生まれなかったものらの翳り

煌めき得るもののすべてをその時

その肉の

煌めかせ

千切れた切れ目に血の玉が

さらされた肌の額の色は

散る

その色を失う

足元につきだした

さらされた二の腕の色は

その翳りの口の

そのきらめきを這わす

開いた空洞に

わたしの見なかったわたしが

心臓が腸を喰った。だから

あなたの眼のなかにきらめいたことは

翳りの楕円の眼球は

知っている

かくに聞き、その日曜日の夜壬生は片岡信夫と Line で通話せり片岡は東京在住なりて宮島の中學時代の友人なりき彼ジャズを愛好すトロンボーンを吹ひて上手なりき在關西なる大學の比より時にニューヨークに渡りてすでに幾度なりき始めに岡山に繊維會社に就職せり三十歳が時廣島なる不動産会社に轉職せり後東京に移動せり是レ本社なりきかくて片岡歎き、素直に歎きてコロナ不況を歎きて嘆き又茶化し笑ひて歎き白して歎きて言さく... 娘、十二歳になつてさ。...

どっち？

ん？

上?... 下? ——ふたりいたよね。

...上。

問題は學校なりき例年通りの學業進行は望めずすでに破綻せりかくて白して歎きて言さく... 最初から、

ん？

ネットで通信教育とか、そっちの方すすめりゃいいんだよ、外国、... って。

さ、——

そうなんですよ？ 日本、... って。

さ、——

なに？

後進国じゃない?... すでに。

壬生笑みて白して笑ひて言さく... 一年くらいなんでもないだろう？

片岡は云さく... 他人の冷静な意見ありがとう。

片岡と壬生かくて笑ひきかくて頷して

あなたに話そう

見よ

まさにあなたの爲に話そう

まさに

夕方に空は淡い紅蓮を西の一部にだけさらした

見よ

晴れた日だったから

見える眼は

空はたしかに夕焼けて、崩壊じみた色をさらした

見よ

あるいは色のかたちを

見えない目も

庭の樹木の向こうにそれとなくには私は見た

見よ

ミーの印象があった

抉られた目も
想い出すともなく思う
見よ
疑問だった
ほじくられた目も
人目をひくには違いない、おそらくは二十代の後半の女がよくわたしに焦がれて
だけいられるものだと
見よ
ミーに男の鬚はなかった
嘴に
店に男たちを群がらせて、そのまんなかでミーに男の匂いはなかった
さわぐ羽根の音の下の
もしそれが本当だったら、彼女は
嘴に
報われない時間を好き放題に浪費していることになった
苛まれた目も
初めて見たのは店をオープンさせたときだった
見よ
三年以上前だったに違いない
燃えた鐵に
初めて私を見た時に彼女は目の瞳孔をひらいた
突き刺された目も
わたしは開かれた瞳孔の空洞にも似た表情のなさを見た
見よ
ミーはわたしに近づくでも無かった
燃えた鉄の
週になんとか私は行った
色なす赤に
それ以上にミーはわたしに近づくでも無かった
焼きつぶされた目も
——元気？
その色彩
と
ふいに空に
Line がメッセージを受けた
月の上りかけたのを知った
片岡信夫だった
その背後に
しのぶ、という名の男
燃えつつあったに違いない

——たぶん。生きてる？
色
わたしは返した
その色彩
アプリが通話を通知した
まなざしは見ていた
だからわたしはシノブの聲を聞いた
むしろ
——生きてるよ
どこまでも く
——入院してるの？
青の
——なんで？
青なす青の
——決まってんじゃない。コロナ
黒の気配に
シノブは聲を立てて笑った
重さを持たずに
——失礼だね
沈み込む青の
——コロナって失礼なの？
深い
——お前が失礼。ベトナム、どうなの？
青なおす猶青の
——今日の天気？
その澄んだ色
——コロナ
あまりにも澄んだ
——ぼちぼち
生き物の
——そっち、優秀なんだってな
生き残り得る可能性など
——先進国の方が莫迦なだけとも云う
なにもさらさないその色
——ひどいね
夢のように
——じゃない？ 感染症の問題を、すぐそれ以上の問題にする
月はそこに
——患者の謝罪とか？
うつろに白い

—日本、特にひどそうだね。そういうの
顯らかに
放っといたら、世界の戦後世界の世界秩序とそもそもの世界の存立形而上学的原理の
朧に白い
内面的諸事象のジェンダーのダイバーシティ的妥当性にまで論が及ぶ
—なにそれ？
顯らかに
—俺も知らない。こっちも、又、はじめたみたい
幻のように
—なんで？
顯らかに
—外国から来たんじゃない？ 一国だけコロナ、ゼロになっても、外国が大量なら大量にいるのと一緒
不意につかれた
—そういうことなんじゃない？ 日本は？
ふりむきぎまの
—終わった
嘘のように
—何が？
月は白い
—また、めっちゃ増えてるな。あれ。もう、おわり
顯らかに
—とっくに終わった国じゃん。日本なんか。未来ないよ。棄てちゃえ
かたちさえ顯らかにせず
—いうね。これ、来年もコロナでつぶれそうな感じ
顯らかに
—だろうね。仕事は？
そのかたちは
—リモート・ワークってさ、それで OK なのとそうじゃないのあるじゃん
そこに浮く
—不動産だめなの？
見よ
—役所もなにもオンラインになったら、実はいける。やろうと思えば
振り返りさえすば
やろうと思えば、いま、徹底管理システム、それなりにつくれちゃうから
見よ
—ネットの犯人探しとか特定捜査とかさ、知ってるでしょ
そこにはまさに
デマにひっかかる可能性多くても、それなりに情報集められちゃうしね

その色彩

個人が徹底管理システム、それぞれに構築できる...

ひとりでそこに

—国家、もういらぬね

焼けた色彩

—紛争と戦争するための装置ってだけなんじゃない？

振り返りさえすれば

—薬、できないもんかね？

月は白く

—総理大臣につける？

紅蓮の色彩

—それと、コロナにつける

月は白く

—...ね、こんな、話ある。聞きたい？

燃え上がった色

—聞きたくない

月は白く

—聞け。ハンセン氏病ってあるじゃん

赤い。みだらなまでに

—癩？ 所謂...

月は白く

—a.k.a. 癩。今ハンセン氏病。...あれの差別問題ってあるじゃん。曰く、むかし
の人間は莫迦だった

赤い。無残なまでに

皆みんな莫迦だった。だから不当にも不幸な彼等を隔離し差別した。...ね？

俺たちは...

月は白く

俺たちの父の父は、その世代は、善良なるままに差別し貶めたのだった

赤い。赤裸々な

遺伝だとかなんだっていうデマもあり。もちろん宗教的な...ほぼほぼオカル
ト的な云々もあり、俺たちは...

月は白く

俺たちの父の父は、その世代は、善良なるままに差別し貶めたのだった

赤い。凄惨なまでに

あれ、なんで嘗ての隔離が差別と断じ得るか知ってる？ 薬のせいじゃん。な
いし、薬のお陰じゃない？

月は白く

プロミンっていう。その薬が終戦の前くらいに開発された。それから一気に
変わる

赤い。惨劇のように

今は使われてないみたいだけどね。その薬も
月は白く
なんか、新薬いっぱいあるみたいね。ともかく、治療法があれば差別も無くなる

赤い。滅びたように
そもそもハンセン氏病自体感染力の強いものじゃない。梅毒も一緒
月は白く
ちょっと一緒に患者といたからってすぐに感染するものじゃない
赤い。燃えあがり、そこだけまさに
だから、そもそもそんなに蔓延してなかったはずだよ。だから、逆に稀な業病たりえてしまった、と

月は白く
ただ、それもプロミン以前。治るんなら何ももんだいない
赤い。まさに今まさにこの時に
例えばヨブもベン・ハーも大内吉繼も北條民喜もさっさと病院行って薬投与してもらえばいい

月は白く
彼等が本当にハンセン氏病だったらね。
赤い。すべてがもはや
未知の古代病だったらごめん。神様プリーズ。医者どもプリーズ。
月は白く
だから俺らは普通に大した善意もなにもなく無邪気にハンセン氏病に対して善良でいられる

赤い。殲滅をさらしたように
ところがさ、ここに新型癩ナノ・ウィルスっていうのが覚醒したらどうするだろう？

月は白く
たとえば、その新型癩は舊型とくらべものにならない感染力を持つ肌がふれあうどころかさ

赤い。目を覆うばかりに
たとえばね。
月は白く
そのウィルスの付着したものにせっしょくしただけで 50 %程度の感染を見る。

赤い。むごたらしいほどの
ここにそんな新型癩ナノ・ウィルスっていうのが覚醒したらどうするだろう？
月は白く

もちろんハンセン氏病菌とちがって飛沫感染もする。
赤い。なぜだろう？
ここにそんな新型癩ナノ・ウィルスっていうのが覚醒したらどうするだろう？

月は白く

症状はハンセン氏病ほどやさしくない。本当に骨まで侵食して人体を變形解体してしまう。

赤い。何故だれも

ここにそんな新型癩ナノ・ウィルスっていうのが覺醒したらどうするだろう？

月は白く

致死率は...いや、生存率は3年で2%くらいだ。しかも新型ナノ・ウィルスだから薬がない。

赤い。なぜ誰も、救わなかったのだろう？

ここにそんな新型癩ナノ・ウィルスっていうのが覺醒したらどうするだろう？

月は白く

しかも進化変異がはやい、微毒化、強毒化をくりかえしながら変異しつづける。

赤い。その色

かつ潜伏期間も2週間から1か月程度のぶれがある。本当はもっとぶれがあるのかもしれない。

月は白く

正確にはだれもわからない。

赤い。その明らかな壊滅の焦げた色を

昨日のくすりは今日訳にたたない...どうする？

月は白く

治療法など誰にも判らない。

赤い。多禮久豆禮琉彌布邇

どうする？

月は白く

救い方も、救われ方も、なにもかにも誰にも判らない。

赤い。崩れ於智琉彌宇邇

お前、どうする？

月は白く

—どうしてほしい？

赤い。流れ、崩れ、崩れ、流れて

—普通に、お前だったら、どうする？

月は白く

—そうな。...手当たり次第隔離するか。で、手当たり次第子供でも作るか。

赤い。その儘に

子供が発病したら隔離するか。で、俺も発病したら隔離するか。

月は白く

だれかが亡びるまで延々と馳ごっこで生んで隔離し隔離し生ませるんだね。

赤い。そこに崩れのかたちを留ませたように

もし、差別が方法論として妥当なら差別させちまえよ。それで誰かがいきの

びられるんだろ？

月は白く

それがだめならみんなで死んじゃえ。ないし、みんな殺しちゃえ。

赤い。なぜだろう？

それが妥当な自然な妥当なんだろ？ だったら、妥協しとけ。

——それで？

月は白く

——不思議なんだよな。...なんで、誰もが未だに倫理的な善意を以てすべてを語るうとするのか

赤い。なぜだれもが

なぜ、善意という概念がまだ滅びていないと断じてゆるがないのか

月は白く

あたらしい、ないし、見得て居なかったそもそのそれ以前の思考様式が暴かれてるんじゃない？

赤い。なぜ放置してしまったのだろう？

——なに？

月は白く

——たとえば独善。おれはおれを守る。なぜ？ 意味は知らない。...以上。それだけ

赤い。見よ

それをよしとしない独善的な善意が存在する。だからそれはそれを善意の一形式として仮構してみる

空の遠くの遠い向こうに

つまり、素直じゃない独善。おれは正しくおれを守る。なぜ？ 意味は知らない。...以上。それだけ

見よ

わたしは笑った

そこに炸裂した巨大な力の

——葛藤

燃え上がる力の

と。私は想い付きで言ったのだった

すさまじい奔流は

——葛藤してあることだけが、彼が倫理的であることを自証する

見よ

——うまく纏めんね。...ひょっとして頭いい？

まさにみずからのかたちも

何の役にも立たないけどね。その物言い。...俺、さ。こう思うの

色をも

——何？

崩壊させて崩れ墜ちかけた

——倫理を問う。それって、不可能なわけ。ありもしないことをあるようにして
語るから

その一瞬を凝固させた

倫理には常に状況が伴う。状況を捨象する倫理はない。状況は判断されなければ状況ではない

滅びのかたちと

何を以て状況を判断するのか

滅びの色を

まさに倫理を以て

まさに常のいつもの風景として

倫理を以て判断した状況に際して倫理を以て倫理的にことをなす... どう？

その焼けた空は

矛盾だろ？

背後に曝し

だから、その倫理の倫理的な妥当性を問うのは刺身の魚に空の飛び方を教わるようなもの

月は白く

倫理は倫理を仮構する力とする。倫理に倫理の妥当性を問うことは如何にしてもできない

振り向けば

だれも、なにものをも、そもそも倫理的に問いたすことは出来ない...

月は白く

たとえ、そこに残虐非道の人殺しがちょっとすみません、雨宿りさせてくださいって言ってきてもね

振り向けばそこに

どしゃぶりにの雨の中に...

月は白く

本当に恐ろしいのは倫理について考える事だ

振り向けば目にさらされる

怪物の顔しか見えない。怪物の顔さえ見えない

月は白く

倫理こそが、もっとも不可解で難しい

電話の後にユエンをあやした。

わたしの膝の上に乗せたその頭を。

撫ぜた。

そしてわたしは見ている。

わたしの足元に、未だ生まれて居ない私の子供の鬚りが赤い肉の色を脈打たせた。

ユエンの生んだ子供ではなかった。

ましてゴック・アインの。

天上から垂れた誰かの死んだ腸の先が、目覚めさせた肛門の歯茎で咀嚼した。

わたしはそれを見ていた。

食事の後ユエンは明日の出勤を歎いた。嘆き、怯え、厭い、憂い、そしてユエンはひとりで笑った。すでにおおよその会社はビルを閉めていた。あるいは所謂リモートワークに切り替えていた。時には給与を半減以下に削りながら。二度目だった。馴れ、諦め、死ぬよりは良しとして、且つ飽きていた。その気配は壬生にも感じられた。ユエンの会社は閉まらなかった。ユエンの会社は流通運送の会社だった。前のロック・ダウンにも会社は閉まらなかった。まさに流通の会社だからだった。壬生はその日ユエンを抱かなかった。寝台に遅れて入ったユエンはひとりで服を脱いだ。素肌をさらした。壬生の半身にすがった。壬生の手を頭をなげるにまかせた。自分のくちびるの息遣うのに気づいた。ユエンは鼻で息をした。壬生は目を閉じた。臆て夜中に壬生は夢を見た。そして目をさました。夢に白い花の咲くのを見た。それは庭に咲いていた花の記憶に違いなかった。目を覚ましたのは夢のせいではなかった。下腹部が尿意を感じていた。ユエンの体が倒れ伏したように壬生の半身に乗りかかっていた。壬生はユエンの頭をなげた。かくて偈を以て頌して

見上げた眼差しに

あしたのてんきをうらなおう

その花は繁殖した黴のように見えた

あしたのはなの

この身はすでに泡沫に同じと知り

いろをみだしてしまわないように

もはや陽炎に等しいと覺る人はその

あしたのてんきをうらなおう

魔羅の華箭を破り

あしたのはなの

そして死の王を見る

においをこわしてしまわないように

夢の中に

あしたのてんきをうらなおう

その大樹の花の名前は知っていた

したのはなの

庭に咲き

かたちをけがしてしまわないように

庭に長い鬚りを投げた

どしゃぶりのなかで

その沙羅の

そのあじさいのはなはかおっただろう

花は茂った葉と葉と

しゃぶりのなかで

葉の茂りと葉と葉の茂りの

そのあじさいのいろはさえわたっただろう

狭間に茂った薺のようにも見えた
のどしゃぶりのなかで
この身はすでに泡沫に同じと知り
そのあじさいのかたちはゆらいだらう
もはや陽炎に等しいと覺る人はその
したのてんきをうらなおう
魔羅の華箭を破り
すでにすぎた
そして死の王を見る
そのあしたのために
死に触れたことなどなかったのだった
たのてんきをうらなおう
自分の死にさえ
すでにくいあらした
死が今に異なる事象なら
あしたのはなに
今目にするものを生と仮称してしまうなら
したのてんきをうらなおう
たしかにそれに觸れることはなかった
すでにながれた
原理として永遠に
あしたのあめに
それは生に異なる以上は
どしゃぶりのなかに
この身はすでに泡沫に同じと知り
ふるえつづけていだらう
もはや陽炎に等しいと覺る人はその
あじさいの
魔羅の華箭を破り
あしたのはなは
死の王など見たことはなかった
どしゃぶりのなかに
その翳りに
かおりつづけていだらう
夢見るわたしは私の顯らかな夢のうちに
すでにすぎた
翳りの肉と
ごうのなごりに
翳りの肉と骨と
どしゃぶりのなかに

翳りの骨と血の
いちどもなかった
そのおびただしい繁殖の咀嚼の音を聞いた
あなたがあなたであったことなど
この身はすでに泡沫に同じと知り
どしゃぶりのなかに
もはや陽炎に等しいと覺る人はその
やがてはなはきいただろう
魔羅の華箭を破り
そのごうおんを
死の王を見る
どごうのような
見上げた眼差しに
そのひびきを
その花は繁殖した黴のように見えた
あしたのてんきをうらなおう
翳る私はわたしの翳りを
とむらいのための
その肉の翳りのうちに咀嚼した
あしたのはなに
精神だけが、やがていまさら肉体の痛みを知った

かくに聞き、7月27日朝壬生ユエンを送りきかくて後に壬生友則は湾岸道路をバイクに走りき北に進みタレバ山際に巨大ナル仏像は見えき其れリン・ウンと謂ふなる佛寺が仏像なりき名ミー・ケーと名づけられし海岸に來て來たれば左手にいつでも見えきそノ山際の道を通り走りテ抜き祁利山道に止まりき崖のガードレールに座りき海を見き見へざりき海岸に人のいるや否や迄は見えざりてかくてすべて悉くその砂の砂なる沙の色にすぎず壬生思ひ想はく人など居ないだろう。

事実、

——人の気配などなかった。

もとより此の通り人通り少なき通りなりきかくていま誰もをらざりき壬生思ひてかくて想ひてもしも一気に、...

一気に？

もしも一瞬で人がすべて、...

すべて？

滅びたとしたらその一日目の朝に、まさに、...

まさに？

その日、朝、拵がったのはこの風景に違いない。

かくてひとり壬生ひとりで笑みてゴック・アインが家に詣づその男ゴック・アイン五年日本に住しきエンジニアとしてなり是れ京都に宿すかくて二十八歳なりき去年ベトナムに戻りき戻りてクアン・ナム省なるホイ・アン近くに僻地に家を買ひき誰かの手放した

る家なりて古き家なりて家初めて見るに壬生思ひてかくて想ひて止まった儘？
時間が、あるいは。

戻されたとか？

まるでいままさに、その 75 年。ベトナム戦争が今まさに終わったように。

つい昨日、サイゴンが陥落し——解放され、——追放され——復帰したその日の
明けた日のようにも

かくに見えき壬生の眼にかくて故に廃墟にも見えき壬生の眼にかくて故に先住の民族の
追われ棄てられた廃屋にも見えき壬生の眼にかくて故にもはや風化の残骸にも見えきか
くてそれをその儘にゴック・アインはひとり住みき彼家族に不義理が在りき渡日の爲の
借財未だに支払わずに捨て置き、家族ともはや連絡を取らずありてかくて憎んでるの？
壬生はいつか聞きたりけるに愛してるよ。

ゴック・アインかくに應へり日本人と違って。

…じゃない？

日本人、家族嫌いでしょ？

ゴック・アイン笑ひき壬生ゴック・アインが家なる庭にバイク止めはじめて茲に詣でた
る時未だ病み伏せざるレ・ヴァン・クアンの激怒せると俱なりて來たるを思ひ出て不意
にも懐しみ祈りかくて頌して

あなたに話そう

侮辱された

まさにあなたの爲に話そう

レ・ヴァン・クアンは激怒していた

ゴック・アインの庭は左の森林の翳りを斜めに受けていた

わたしを誘って

右の森林の翳りはそれを森林自身に投げた

その呪われた

家は森の道の中に在った

呪われた獣の住む家に

バイクの上で樹木の匂いをかぎ取ろうとした

殴り込みをかけた夜に彼は

土の匂いがするように思った

レ・ヴァン・クアンを始めて見た。だから

濡れても居ない土が、足の下低い處に静かに停滞したように思った

レ・ヴァン・クアンも初めて見た。写真

その時、その一瞬には

娘が見せたそのスマートホンの写真の男を

そう思った一瞬とでも謂う他に名付けようもないそれ固有の

レ・ヴァン・クアンは始めて見た。

その、

彼の肉の目に

その一瞬には

嗅いだ
鳥が鳴いたその、とも
獣の匂い
木の葉が落ちたその、とも
雨の中の
君が振り向いたその、とも
ふりしきる雨の
星が流れたその、とも
野生の雨に濡れた野生の
月が落ちたその、とも
獣の
太陽が解けたその、とも
その夥しい柔毛の
そう思った一瞬とでも謂う他に名付けようもないそれ固有の一瞬に
濡れた匂い
土の匂いは踏み得ない下の低いそこに停滞した
ゴック・アインの肌がまき散らす
土の道のいきどまりにバイクを止めた
そのひどい悪臭を
左には屋根の壊された、——あるいは崩れ落ちた？ 本当の小さな廃墟があった
レ・ヴァン・クアンは、じめて嗅いだ
だれかがいつか取り壊しかけて、何時か誰かが
愚弄された父親は激怒する
途中で投げ出してしまったように
だからレ・ヴァン・クアンはまさに激怒していた
わたしにはそんなふうに見えた。真ん中にゴックアインの平屋があった
慰み者にされた父親は激怒する
トタンの屋根がコンクリートを覆い、数百平米の床面積に
だからレ・ヴァン・クアンはまさに激怒していた
バス・トイレの外に区切りは一つしかなかった
まだ彼には
その左に土台だけ残した廃墟の、崩されて積まれたブロックの残骸がその儘に日
差しを浴びた
まだレ・ヴァン・クアンに死の翳りは
ゴック・アインの爲にクラクションを鳴らした
誰の目にも兆していなかった
ふと、たぶん二三年ぶりにならしたクラクションだったように思った
レ・ハンはそのかたわらに私に笑んだ
前は、指が触れてなったのだったのだった
ひそかに

ゴック・アインは出てこなかった
そんな日々の中で
だから、ゴック・アインの爲にもう一度クラクションを鳴らした
レ・ヴァン・クアンが死ぬはずもなかった
ベトナムでは挨拶のようにもクラクションを鳴らした
親族の娶った日本人男と酒を飲んだ
誰もが一日に一回以上は必ずならず
レ・ヴァン・クアンが死ぬはずもなかった
そんな暇があるならハンドルを切るべき時にも、敢えて
レ・ティ・カンが彼を諫めた。血気盛んで
彼等はクラクションを選択する
すぐに誰かを罵る陽気な彼を
そして正面から衝突する
レ・ヴァン・クアンが死ぬはずもなかった
ゴックアインは出てこなかった
レ・ダン・リーは男を知った
不在なのかもしれなかった。
侮辱された父親は激怒する
だから、ゴック・アインの爲にもう一度クラクションを鳴らそうとしたその時に、
だからレ・ヴァン・クアンは激怒した
土の匂いがするように思った
ゴック・アインは匂い立つ
濡れても居ない土が、足の下の低い處に静かに停滞したように思った
その白い
そしてわたしはみていた
なめらかな肌に、あざやかに
眼の前の家屋のひき開けられたままの四面のドアの木材の翳りからゴック・アインが現れたのを
雨に濡れた獣の匂い
ゴック・アインは美しかった
ひどい悪臭
私の目にはそう見えた
ゴック・アインは私を初めて見たのだった
女性的にも見えて、その癖掘りの深い顔は、むしろ
あららいだ
インドや中東の人種の女のようにも見えた
激怒のレ・ヴァン・クアンの傍らに
やさしくほほえみ哀れむ時も、眼差しは軽い、踊るような軽蔑を
だから
彼は匂わせた。彼が瞥え

わたしは彼を始めて見た。その
尊敬の想いで仏師を見詰め、帰依の微笑みを浮かべた時も
うつくしいひと。その
年上の人間は誰もが彼を侮蔑し厭うた
穢い
長い、細い首を裏切るようにしなやかな筋肉が鞭の痛みを匂わせた
穢れた獣の匂いのひと
だれもが彼の
暴力の気配に怯えた。だれもが彼の
レ・ヴァン・クアンは気付かなかった
時に本当の暴力に怯えた。彼が
報復に
誰より平和主義に過ぎなかったにしても
ともづれた私に、最後に
誰もが彼の裏切りを恐れた
裏切られたことには
その誰かに彼がそれほど興味を示していないときにも
レ・ヴァン・クアンの
ゴック・アインはほほえんだ
右の小指をさかさまに
黒いスウェットの下だけをはいて、私の眼は彼の上半身に素直に見取れた
わたしがへし折ってゴック・アインの爲だけに
心も、魂も、精神も、そして当然性欲も俱づれにして
笑った時、彼は
咽の奥に吐き気に似た渴望を鼓動させながら
ひとりですでに失神していた

壬生はその日ゴック・アインと戯れた。渇き、立ち上がりかけた壬生をとどめて、彼は
壬生の至近にわらった。飲ませたげるよ。

彼が口に含んだミネラル・ウォーターを、彼の唇が流し込むにまかせた。戯れた。彼の
くちびるが壬生のそれを啜えてふさぐままに任せた。移したげるよ。

そうゴック・アインは云った。口から。

コロナ。

ね？

俺の。ここに、...と。

ゴック・アインは睾丸にふれた。繁殖するらしいよ。

この中で。

ゴック・アインは笑った。ゴック・アインの目は戀をかくさなかった。壬生の眼はもと
から彼に戀をさらしていた。白い筈の液体をそのまま口の中に、ゴック・アインはひと
りで、閉じた齒に咀嚼のふりをした。吐き捨てるように壬生の腹に吐いた。唾だらけに、
それは匂い立った。聲を立てて笑った。ゴック・アインに軽蔑はなかった。侮蔑も。壬生

に軽蔑はなかった。屈辱も。ゴック・アインの唾に塗れたその色の白を指に撫ぜた。そして壬生は笑った。ゴック・アインは、まさに壬生とともにわらった。かくて偈を以て頌して曰く

そんな気はなかった
ひとしれず
あなたを穢そうとは
ふったゆきは
戀ゆえに？
だれのめにも
そんな気はなかった
ふれないまにもしろいまま
あなたを壊そうとは
よるのふかい
戀ゆえに？
あおくらいうちにもしろいまま
もえあがるような想いがもはや
いつかしんだ
壊滅的な痛みをさらし
ちいさなけものの
咬みついた喉に
やせいのむくろを
燃え上がった陽炎の吐き気のする温度にさえも
おおいかくしてしまつてなおも
茫然として
しろいままに
そんな気はなかった
めのまえで
あなたを穢そうとは
ふったゆきは
戀ゆえに？
だれのめにも
そんな気はなかった
ふれないまにもしろいまま
あなたを壊そうとは
ひるのひに
戀ゆえに？
ほうかいしていくようかいの

かくに聞きゝ壬生ゴック・アインを詣で戸口に顔をあはせ顔をあはせたる時にゴック・アイン壬生に笑ひて笑ひかけたる須臾不意に双眇杳然たりて相貌茫然たりて彼我を忘れきゆゑ黙しゆゑ壬生彼を見て観かゝる刹那のゝちにかくてゴック・アインかくて云さ

く夢、...

夢、見た。

かくてかるがゆゑに壬生應へて言さく夢？

いま、...

夢？

迦久亘迦ル駕由ゑ爾微カに笑ミて笑み乍らにかくて頌して

あなたに話そう

豪雨よ

まさにあなたの爲に話そう

豪雨よ、まさに

葉と葉のすきまから日がもれてふれた

豪雨よ

わたしの眼に

降りしきり

——夢、見たの

豪雨よ

何の？

その

そしてそのほんの数秒あとにゴック・愛のまぶたに

水の水なる

——昨日...夢

粒の無際限の

——夢？

見豆乃不見鳴琉

——嘘

粒の無際限の

わたしはわらった

しづくよ

ゴック・アインと私の爲に笑った

飛沫、散る

——今日...さっき...朝...

須居滴乃散飛沫

——夢、見たの？

鳴り騒ぐ

——見た

轟音の

——どんな？

豪雨よ

——エンパイア・ステートビルが一番上で、裸でオナニーした

叩け、その

わたしはわらった
やさしい紫陽花の
ゴック・アインと私の爲に笑った
彌波羅迦那阿ジ彩乃
——入るよ。いい？
はなびらを
——いいよ。…王様
豪雨の閉ざした
かたわらをとおりすりるとき、私は彼の影もふくめた木戸の翳りをくぐった
正午の暗がりのうちに
臭った
叩け、その
ゴック・アインの体臭
やはらかな紫の
雨に濡れた、野生の穢い獣の柔毛じみた臭気
色の周囲に
臭気として顯らかな、あからさまな臭気
雨にゆらぐ
——どうぞ
緑りづく葉を
彼はささやいた
叩け、その
——ぼくの、だくじゃいしゃ
葉と葉ゝの
聞いた
ふるえる色を
わたしはその聲を
ふるえ、こだまするように
——濁しやいじゃ…
わたしのころはいつかふるえて
くりかえした
ふるえ、こだまするように
自分のくちびるに
みあげたまなざしの
聞いた
みたふうけいさえ
——だくしやいじゃ…
ふるえ、こだまするように
彼の聲を
その怒號を

——濁しい虻？

ふるえ、こだまするように

わたしの眼は振り返って彼を見ていたのだった

飛び散った吐瀉物の臭気の中に？

その時には

ふるえ、こだまするように

笑って、私は云った

蟲が葉の上をほうのを

——独裁者？

ふるえ、こだまするように

——そうとも言う...あなたに教わりました

それでも嘴は容赦しない

彼の笑んだ目には潤った艶と、同等の厭わしい侮蔑がある

ふるえ、こだまするように

彼の心をはあくまで置き去りにして

まばたく瞼に

——なにしに來たの?...

ふるえ、こだまするように

ふれた花をも怯えさせるに決まっていた

突き刺した針に

——いじめにきたの？ 俺を

ふるえ、こだまするように

屈辱と恍惚と俱に

滲んだ血をそっと

——穢いね...

いっぱい百合に

わたしは聞いた

埋葬した。その

かれの愛しいか細い、竹笛の低い音のようになる聲を

ふるえ、こだまするように

——好きにしたら？

匂い立つ無残な

息が立つ

ふるえ、こだまするような

かすかに亂れた息が

花の花びらの臭気を憎んで

笑っていた、その息が

ふるえ、こだまするように

ふたりの息が亂れたままにこすりあいもしなかった

みだらな臭気

それらはちいさく、こまやかに亂れた

ふるえ、こだまするように

かつて云った

饅えた、くさった

ゴック・アインは私の耳に

腐った花の腐った花汁のような

その唇がふれそうな距離で

そんな

——極悪非道の、裏切り者の王様

白い百合の無言の臭気

...ね。つぎ、一緒に地獄に生まれようね...

ふるえ、こだまするように

牙だらけの花のない花の中に

ゴック・アインはわたしにそう云って、同じように息を亂した

牙だらけの花のない花のなかに

邪気の無い笑いの、さまざまに匂う表情のひとつとして

かくに聞き、ゴック・アインが居宅ふた間なりき壁無き數百平米な琉居間兼寢室兼ダイニングのタイル張りな琉ひと間及び奥に物置きありき部屋中央に日本より空輸のソファありき合成革なりて又色白なり色に乃ミより選びきゴック・アインが膝に壬生頭載せて横たわりきかくて壬生憩ふ憩ひてゴック・アインが愛撫す琉にまかすかくてゴック・アイン指に T シャツの隅を懸けて女久利あげ壬生の腹部を撫でき壬生憩ふ憩ひてゴック・アインが愛撫す琉に麻迦須かくてゴック・アイン壬生が額に唇をふれてふれさせ壬生憩ふ憩ひてゴック・アインが愛撫するに摩迦須かくてゴック・アイン壬生が左の乳首に右の指先にふれてふれ戯レ壬生憩ふ憩ひてゴック・アインが愛撫す琉に麻訶シかくて頌シて

あなたに話そう

花を

まさにあなたの爲に話そう

埋葬の花を

時に目を閉じた

腐った花の

時にうすく目を開いた

腐った花汁の匂いの

私は時には見た

匂い立つその

天上を組んだ木材の翳の向こうの錆びたトタンの色を

シ羅由里の波那をでも？

時に目を閉じた

花を

時にうすく目を開いた

埋葬の花を
私は時には見た
肌に干からびた
見下ろしたゴック・アインの私を見た眼のかすかな軽蔑の色を
ちいさなバクテリアの末路の無残に
時に目を閉じた
血の中に消えた
時にうすく目を開いた
いくつものウイルスの知られざる末路に
私は時には見た
肉体の
ひらきかけた脛にかさなる睫毛の翳の向こうのかたちと色の暗示を
さまざまに朽ちた
時に目を閉じた
細胞の無数の
時にうすく目を開いた
朽ちた死に
私は時には見た
それら他人の
私は、私が彼を愛していたのは事実だった
無数の死どもに

かくに聞き、かくて目を閉じて由羅由良等壬生ゴック・アインが体臭を嗅ぐ或は是れ由羅由良等悪臭なりき腐敗しかけたるワインに似る眼を由羅由良等比良久閉じて壬生ゴック・アインが顎を下より撫ぜきかくて由羅等比良久波那知ルその形態を又目を閉じて壬生ゴック・アインが体臭を波那比良久嗅ぐ是れ悪臭なりき腐敗シかけたるブルー・チーズに似る眼を比良久波那比良久閉じて壬生ゴック・アインが顎と唇をつなぐ陥没を下より迦保利撫ぜきかくて知るその迦乎利形態を又目を閉じて壬生ゴック・アインが迦淤里体臭を嗅ぐ是悪臭なりき腐敗しかけたる百合に醜酔した麴を混ぜたに似る由里乃眼を閉じて壬生ゴック・アインが顎を下より撫ぜきかくて由利乃知るその形態を又目を閉じて波那比良久由利乃壬生ゴック・アインが体臭を嗅グ是れ悪臭なりき腐敗しかけたる由利乃迦保利ワインに似る眼を閉じて壬生ゴック・アインが唇を由羅等下より撫ぜきかくてその由羅由良斗形態を知りその由羅、斗表皮のかすかにさ、く、レだちたる粗さを心に由羅由良羅等痛み痛みてかくて頌して

——仕事、しようよ

ゴック・アインは云った

私の素肌を愛し、愛し終わる事など知らないくせに愛しおわり、そして白濁した唾液を垂らしたあとで

——ぼくたちの、仕事をしましょう

ゴック・アインは笑ってそう云った

かさねあう素肌と素肌にわたしの素肌だけを愛し、隠れて自分の素肌をも愛した

わたしと俱に
愛し、愛し終わる事など知らないくせに愛しおわり、彼は愛し終わった
私と俱に
讚え、讚え終わる事など知らないくせに讚えおわり、彼は讚え終わった
私と俱に
嫉妬し、殺したい程に、喰いちぎりたいたいほどに嫉妬し、彼はそのときまばたきも
しない
嫉妬し、嫉妬し終わる事など知らないくせに嫉妬しおわり、彼は嫉妬し終わった

私と俱に
——お前、まだ、終わってないじゃん
私は云った
——これから、終わらせてよ
ゴック・アインはそういった
そのときまばたきもしなで
そして白濁した唾液を垂らしたあとで
日が翳りもしないうちに翳りはそこに突出していた
尖った鉛筆の失敗作をチーズで溶かしたように
その翳り
淡いグリーンのタイルの上に飛び出した肉の、骨に咬みつかれた肉の色
そのかたち
淡いグリーンのタイルの上に飛び出した骨の、肉に咬みつかれた骨の色
そのかたち
自由を得た神経のそれぞれが重力を知らないから自由に彷徨い血の玉にふれた
自分の、或いは自分も所属しているには違くない他人の、他人でありえない自分
の肉体

それが玉散らせたそれに
たぶんそれが、レ・ヴァン・リーだと私は想った
ゴック・アインが一番最後に毀した女
レ・ヴァン・リーの未だに死んではいない魂の、まさにその翳りに違くないのだ
と

私はひとりでそう思っていた
だから私は部屋の隅のキャンバスをイーゼルごと右手に運んだ
ゴック・アインがその素肌を翳りと光の斜めの混淆の中に曝した傍らに
舞い散るほこりの、射し込んだ光に直射されたそこにだけにきらめきの中に
油彩絵具の臭気が匂う
そのむこうにゴック・アインの悪臭が目覚めた
危ういほどに美しい男の、その肌の
雨に濡れた野生の獣の柔毛のような匂いを

腕を極端に反対にそらして、そして腰を突き出して不細工に足を折った彼の
褐色の色さえ色を失いかけるほどに反り返らせた背筋が呼吸を困難にする
ゴック・アインは足の指を痙攣させた。

私は彼を描くのだった。

ゴック・アインの爲だけに。

戯れだったに違いない。思い付きの、——いずれにせよ彼等は、油を作成した。ひとり
は (...即ちゴック・アインは) モデルとなって、ひとは (...壬生は) その肉体の筋の
悉くをさかさまに曲げたゴック・アインの痙攣する筋肉を、骨格を、皮膚を、——白く
ただ塗りつぶしただけの顔乃至表情をは除いて、そして、彼等は描いた。

その油彩画のキャンバスは、ゴック・アインが収集してたある近所の画家の油彩画をつぶ
した。その画家の絵は常に同じだった。同じように、白い色で、白、そのさまざまなヴァ
リエーションで、描いた。

何らかのかたちを、—— (青みのある) 白で、なぐりつけるように—— (赤みのある) 白
で、すべらせたように、—— (むらさきがあった) 白で、筆先の気付かなかった過失の
ように、—— (黄みのある) 白で、吹きつけたように、—— (深い、深みのある) 白で、
むしろ抉り取ったように—— (不意に至近に浮き上がったような) 白で、...雪?

その絵を見た三月に壬生は云った、——雪?

かくて偈を以て頌して曰く

苦痛を描くつもりはなかった

花がおちる。その

苦痛とも、快樂とも、そうではないもっと

みずからの重みの爲に

純粹なさまざまな感覚器の目覚めを描こうとしたのだった

縁もゆかりもない所詮、他人の

だれがそれを苦痛と名づけたのだろうか?

土の上の無関係の上に

名づけ、そして辱めたのだろうか

その色は慥かに白かった

知るべきだった

繁殖する

世界はあなたの爲にはないと

黴のように見えて

だれがそれを快樂と名づけたのだろうか?

夥しいそれら、際限もなく

名づけ、そして貶めたのだろうか

様々な色の、即ちただ

知るべきだった

緑のひとこに片付けられた

世界はあなたの爲にはないと

様々な色の、愚弄するかの

破壊を描くつもりはなかった
葉のしげみの中に
破壊とも、育みとも、そうではないもっと
その白い、それら花の
あざやかな息吹きが目覚めを描こうとしたのだった
それらの無際限なしの繁殖
だれがそれを破壊と名づけたのだろう？
黴のような
名づけ、そしていたぶったのだろう
繁殖する黴のような
知るべきだった
それは土に墜ちたのだった
世界はあなたの爲にはないと
夢の中に
だれがそれを育みと名づけたのだろう？
私だけが見た私の
名づけ、そして愚弄したのだろう
夢の中に
知るべきだった
色がおちる
世界はあなたの爲にはないと
その色のその
あなたを描こうとしたのだった
かたちが無関係な
あなたが息吹かせたその息吹きを
土の上に落とす
あなたのへし折れそうな反り返る咽仏を
その黴の息吹きを
あなたのくずおれそうな背筋の痙攣を
その繁殖の息吹きを
あなたのひきつけをおこす二の腕の汗の震えを
その黴の繁殖の息吹きを
垂れ落ちた髪の上にまで伝う汗を、その臭気の
その黴のような息吹きを
つきだされたあなたのそのちぢこもった怯えの滑稽を
その黴の繁殖のような息吹きを
そりかえった足の指の血の通わない細かなおののきを
その色の白の息吹きをレ・ヴァン・リーの眼はなにをも見ない
ひん曲がった空洞だから。故にその体液を玉散らす
かくに聞きゝすべて悉くに関節をさかむけてそらせ全裸なるゴック・アインその肉体を

曝しき晒しかくて全身に筋に痙攣させきかなくて壬生友則白きののしりごえゑの元の繪が
上にかさね重ね又いつかみづから引きたるののしりごゑの線また塗りたる色が上にもか
かさね重ねてののしり塗り描きかなくてののしり描き汗にまみれたるゴック・アイン息あら
らげてののしりごゑのくずれおちそうになるに壬生その傍らにののしり添ひきかなくて彼
に觸れかくののしりてゴック・アインは誘われきゴック・アインのののしりごゑの
ついに、ふいに

とだえたあとの沈黙

かくて終わり果てたるに崩れんとするをその軀を壬生腕に抱く抱きて抱きとめ得ずして
共にくずれきかなくて頌して

あなたに話そう。

ぬりつぶした

まさにあなたの爲に話そう。

色で。いろが

わたしたちは戯れた。

いつかかたちづくった

時間の限りに。

かたちでも

だれに頼まれた譯でもなくに。

冒瀆じみて

おそらくは精神と肉体のたゞの浪費に。

姦淫じみて

わたしたちは戯れた。

その白と白

わたしのくちびるはそしてふれた。

さまさまの白と

ゴック・アインの胸に。

志露乃佐摩佐麻乃

その張りつめた筋肉の、弛緩した息遣いに。

しろを

荒く粗く轟いざわめきに。

ただ

わたしのくちびるはそしてふれた。

白イ風景を

ゴック・アインのみぞおちに。

塗りつぶした

その不意の陥没の、骨格の痛ましい硬さに。

侮辱するように

亂れる息遣いのざわめきに。

破壊するように

わたしのくちびるはそしてふれた。

弑殺するように
ゴック・アインの腹部に。
ト殺するように
その揺らいでえづく、罵倒するような呼吸に。
ぬりつぶした
かなしいほどのやわらかな伸縮に。
引き攣る
私は顯らかに、鮮明に、嫉妬していた。
その
ただ、ゴック・アインに。
ゴック・アインの
その肌のすべてが立てた悪臭をすいこんだ。
からだをなぞって
わたしはのくちびるは彼に口づけた。
引き攣る
そのやわらかさと、唇への、やわらかくはなりきれない抗いと、湿らせた潤い
にも。
その迦良陀乎記念佐せて
彼は息遣っていた。
その白い
耳の近くに、壬生はゴック・アインの唇が、吐く息を聞いた。かくて傷を以て頌して曰
く
体の上に体をかさねた
鬩りは床に極彩色の
彼は気付かないだろう
肉の色の儘に鬩る。ふれるだろう
かさなった体もいきづかっていることをは
それは、玉散ったその脳漿に
彼だけは気付くだろう
鬩りは床に極彩色の
かさなった体のはなつ温度に
骨と骨髓の色をさらす
かさなった体が気付き得ないうちに
咀嚼する
その匂いにも
音響の中に
かさなった体が気付き得ないうちに
それらは鬩る
かすめとるのだった
いまだ死なないものたちのその

わたしたちは
魂が翳る
お互いにお互いの
眼差しの内に
かさなった他人の温度と
向こうの壁に
匂いをだけを
死者が翳る
秘密にさえしないうちに
何十年も前の、その翳りに

かくに聞き、壬生の身体は床の上にゴック・アインを布留琉ル、抱き、かくてゴック・アインは布留琉ル、憩ひき壬生乃腕ノうちに憩ヒ壬生は布留琉ル、憩ひキ憩ひ息遣ひテかくて布留琉ル、語るともなくに語りき壬生は布留琉ル、と見き眼差しの部屋の突き当りの壁の際に布留琉ル、と蛇は布留琉ル、と這ひき布留琉ル、と壬生は見き且つゴック・アインは見ざりき彼目を閉じきゆゑミザリき見き壬生はひとり布留琉ル、と蛇の布留琉ル、体軀を布留琉しならせたるを布留琉ル見き且つ布留ゴック・アインは見ざりき彼が瞼壬生の二の腕にふれてかすかに閉じたる儘に瞬き、ゆゑミザリき見き布留壁の翳りと傾ぶく布留斜めの光りの狭間に布留琉蛇の布留琉ル旋回す布留琉ル、をかくて頷して

あなたに話そう。

まさにあなたの爲に話そう。

言うともなくに言う。

何を云いたいわけでも無くて、唇が言葉を知るから。

だから、おそらくはゴック・アインは云った。

——どうする？

——何？

わたしの唇は笑った息をだけたてた。

腹部と胸はかすかに揺れた。

笑うべきことはなにもなくて、唇は笑った息を知ったから。

だから私はゴック・アインとわたしの爲だけに笑った。

——どこか、行きたい？

——どこへ？

...海へ？ と。

私は心の中にだけ答えた。

ゴック・アインの耳にはふれないことを熟知しているながら。

彼に秘密にしたわけでもなくて。

——コロナの中に？

私はそう云った。

——新型コロナの生き生きした繁殖の中に？

ゴック・アインは遅れてようやく笑うのだった。

聞き取れ無い程の聲を私にだけ立てて。

——知ってる？
彼はそう云った。
——コロナ 19 って、昨日...
かすかにでも
——10 人くらいだけ？
瞼さえ開かないままに。
——死んだの？
そう云った私の聲は、ゴック・アインの耳に聞かれた。
——死んでない。... 病気の人、10 くらいあった。
——ベトナム？
——ダナン。
——多いね。
——どこでコロナになったか、わからない。日本と一緒に。
——まだ、少ないな。
——ね。
と。
ゴック・アインは身をもたげて私を見た。
見て、そして笑いかけて、そして笑い切らずに、ゴック・アインは云った。
——どこか行く？
——どこへ？
——例えば、...
——海？
——コロナの海？
——危ないな...
私は云って、笑いかけてゴック・アインを見た。
ゴック・アインの眼は私を見上げていた。
——ここも同じ。
ゴック・アインが云った。
——ここにもいるんじゃない？
——そう？
——たぶん。
——俺たち、コロナだね。
——多分ね。
ゴック・アインはそしてわたしの頸を腕につかみ、そして私の唇に口づけた。
ゴック・アインはふたたび目を閉じていた。
私は彼の胸に指を撫ぜた。
壁際の翳りに蛇は停滞した。
憩う？
蛇は。時には。
私は見ていた。

ゴック・アインとわたしの爲に目も閉じないで。
その尾の先端にだけ斜めの光は照射していた。
舞い上がった塵り等のきらめきのこまかやさと共に。
無際限な迄の、膨大な、極小のきらめき。
蛇は時に憩う。
光りの中にさえも。

かくて偈を以て頌して

彼に秘密にした譯でも無く
ぼくたちはきくだろう
わたしは音もなくたちあがる
ごうおんを
いつかの彼がそうしたように
ぼくたちはしるだろう
飛沫が散った
なりつづけていたごうおんを
ひとりであせを流した時に
すでにききつづけていたことを
彼を思った
ぼくたちはしる
わたしと俱にいない彼を
ぼくたちはしっただろう
あるいは孤独を
そのごうおんの
あるいは騒然を
すでになりつづけていたことの
ひとりの心の多彩の聲の
とおいきおくさえあったことをも
水のつぶと線なす水が、夥しくも私を這った
ぼくたちはきいた
飛沫の散った飛沫同士の撃ち合いの飛沫
ごうおんを
騒音を聞いた
みみのちかくに
体の周囲に固まって立つ
やりすごしもしないで
それらの無数の音響の群れを
ぼくたちはきいた
拭うともなく見る鏡の
ごうおんを
水滴を帯びた無数の水滴の

みみをろうして
色の無い色彩の様々の向こうに
ふさぎもせずに
私は慥かに私を見た
ぼくたちはさらした
私は翳る
あなたのその
あなたに話そう
すなおなすはださえも
まさにあなたの爲に話そう
ぼくたちはさらした
その翳った肉の色に
さいしょからなにも
未だ死なない魂の
まもろうともしないで
飛び散らした血と体液の粒に
おどろくほどかんぺきな
私は翳る
むぼうびのうちに
あなたに話そう
ぼくたちはきいた
まさにあなたの爲に話そう
そのごうおんを
あなたは翳る
やがてはとおくにきくだろう
その、私の魂がひとりで翳る
ぼくたちはきいた
もはやひとりである、複数である意味をも無くして
やがてはとおくにそのごうおんを
あまりにも他人の
ぼくたちがさったその
肉と骨の色の翳りに
なごりとしてだけ

かくに聞き、かくテタ方に壬生レ・ティ・カンが家を詣でき是病ミて死に到らんとすレ・
ヴァン・クアンを見舞フ爲なりきレ・ティ・カンはユエンが父方祖父なりき故にコイが
父なりレ・ヴァン・クアンはレ・ハンが父なりき今癌に倒れてありき所謂末期なれば病
院を6月に出てレ・ヴァン・カンが家一階カンと同じ部屋に持ち込まれたル医療ベッド
の上に臥してありきハン父と俱に住シき歸宅の当初未だ固形の肉又魚又菜を食シき7月
もはや粥以外には食さズ歸宅の当初未だ自由に話し且つ話して自由に歩み且歩ミてジ由
ウに笑ひてかくて今悉くに倦怠ス最早呼吸シ吸み吸ひテ吐き吐キテスうにも倦怠すゆエ

にすでに人工呼吸器に守られきかくて壬生嘗て見て思ひて想ふにここでも？

ここでも人工呼吸器？

ここでも、猶も？

かくて壬生見舞うに目に見て何ヲも言さず又眼差シに何をも兆サズシテ然れどもうちに何をか觀じありけんことのみ壬生は觀ジきかくて壬生カンの部屋を出き壬生ひとり彼を介護せるレ・ハンをひそかに呼び止メきかノ女ひそかに母國語以外に知識なし故にひそかに。

ただひそかに片言に壬生かの國語迦多利て繰り返シ又ひそかに繰り返シ迦多里祁琉乎ハンおかしがり又ひそかに、

むしろひめつめかして喜びて笑ミき壬生頭を撫できヒエン及びひそかにタム離れてありキふたり壬生とハンにはひそかに氣ヅかざるを装ひテふたりだけにひそかに迦多喇岐ハン笑ミて壬生を見てひそかに靨をハりて瞬きふたたびひそかに、

まるで誰にも。

まるで

ひそかに笑ミてカンが休める部屋に入る是れ介護の爲を装ふなり犬ひそかに家が前なる道路がひそかに端にまで出てひそかに向かふに匂ひをひそかに嗅ぎ、壬生そノ上げ巻きたる尾とそのひそ下なる肛門をひそ見き日は翳りて空はひそ青のみ濃クし且ツひそ色褪めかケてありき家はひそ東向きなりき故に壬生はひそかに思ヒき是壁を抜けたる背後のひそかに、

誰の目にもひそかに空には夕焼けの色あざやかならんとかく也かくて頷して

あなたに話そう。

罵倒された空が

まさにあなたの爲に話そう。

その罵倒された空が

ハンは眼差しで語った。

罵倒された蛭を吸え

だれかと俱にいる時には。

その罵倒された蛭を吸え

私にだけ赤裸々に眼差しにだけ隠さずに語った。

心は沈黙を描いた

危ういほどに素直に。

まるで日影に咲いた

ひとりの男が死に懸けていた。

甲殻虫に寄生したキノコの

その年に、世界中でおおよそ 1,100 万人が罹患しおおよそ 70 万人がで死んだ新型コロナの時に中で。

投げ放った菌糸の數々に

癌で、ひとりで死にかけていた。

罵倒された空が

その 60 過ぎの痩せた男は、さらにあからさまにも痩せて痩せ細り、彼も知ってい

たはずだった。

その罵倒された空が
ハンの赤裸々な想いには。
罵倒された蛭を逆剥け
彼は何も諫めなかった。
その罵倒された蛭を逆剥け
わがままなハンをは。
涙さえも
ハンは誰にも素直だった。
流れ落ちた
自分が誰を愛しているかについては。
かすかにその
褐色の肌に素直に笑った。
あたたかなその
ハンは、死にかけた父の傍らで、私の前では。
涙さえも
私の爲にだけ、素直に笑った。
凍り付いて牙を曝した
レ・ヴァン・クアンは二度結婚した。
零度の朝に
最初の妻は別れる前に子供を二人生んだ。
罵倒された空が
妹はクアンが引き取った。
その罵倒された空が
兄は母とサイゴンに行った。
罵倒された蛭を弔う
それから先は誰も知らない。
その罵倒された蛭をむしろ
次の妻は判れる前に娘を生んだ。
落ちろ
今年 12 歳になった。
空は
クアン・ナム省の海辺の方に住んでいた。
最後にせめてもの埋葬として
実家からは遠く離れて。
燃え上あがり
病院にはハンと一週間づつ交代で看病に来た。
燃え上がって崩れ
ハンと彼女が口を利くことはなかった。
崩れ去り、その

カンも、ヒエンも、タムも、口を利くことはなかった。

崩れ去る

見舞ったカンの部屋の中で、あらためてクアンがもうすぐ死ぬことを私を知った。

轟音の中で猿と共に

何度目かにも。

罵り騒ぐサルの子と共に

クアンはいずれにせよ Covid19 とはかかわりもなく彼の固有性のうちにだけ死んで行くのだった。

罵倒された空は

なにか、ほしいものはあるか？

その罵倒された空は

私は呼び止めたハンにそう云おうとした。

まさにそのときに

名前をよばれて立ち止まり、振り返り、呆気にとられた顔をひとりでハンはさらした。

目覚めて落ちるべきだったと

わたしは云った。

目を逸らした

ハンが好きなその唇に。

——エム、ムオン、ジー。

ハンは笑いかけて笑い切らない儘に私を見ていた。

——エン、エム、エン、モン、ムオン、ムウオン、ジー、ギー、ジイー、繰り返す。彼女の猜疑のある眼を見詰めて。

——エン、エム、エン、

繰り返す。彼女の困惑のある眼を見詰めて。

——モン、ムオン、ムウオン、

繰り返す。彼女の懐疑のある眼を見詰めて。

——ジー、ギー、ジイー、

——Em muon gi a ?

ハンは鼻にかかったアルトで（ム、ムオ、オン、）云った。

目を逸らした

ハンは（ンオ。オオ、オン、ンオ）笑いかけて笑いきらずに私を見ていた。

目を逸らした猿が

私すでに（ンオン、ムオン、ンオン）わらっていた。

——チャー、エム、

笑いながら私は繰り返す

——チャー、チャー、チャー、エン、

——Anh noi cho em a ?

わたしたちはすでに（チ、チ、ヨー）私たちが戯れている事をは（チ、チ、）知っていた。

世界に絶望して泣き叫んだ。その
だから私たちは（チ、ヨーチ、チョー）戯れていた。

全裸の猿は野生の朝に
ハンが（チ、オチョ、チオー）聲を立てて笑った。

——何が欲しい？

私は云った。

——フルーツ、と。

ハンは応えて聲を立てた。

涙をためた
カンと、ヒエンと、タムにはしゃいだ。

——明日、な。

と。

涙をいっぱい
私は云った。

いっぱいに涙をためた目の涙に
彼女は素直に幸せだった。

振り返った猿の酔いつぶれた目の先には
彼女は心の儘にはしゃいだ。クアンが癌に倒れる前、旧正月が明ける日から
月は翳る

三か月以上家出していたハンは。

あなたも殺したかもね。

壬生は心にひとりで心にそう云った。

あなたも、——と。ゴック・アインのその肌の悪臭を思いながら。死にかけのレ・ヴァン・クアンのやつれた肌の色を見ながら、——こんなにも、
と、

こんなにしても

まだ生きてるなんて。壬生はそのかさついた唇に想った、あなたも、——と。

レ・ヴァン・クアンを殺したひとりに違いない。

ゴック・アインとその肌の悪臭を思いながら、かくて偲を以て頷して曰く

斜めにやわらかすぎる光が入った

その日は雨が

その部屋の中に、——ユエンのいない

朝から雨が降っていた

その部屋にことわりも無く、まるで

記憶違いなどあるはずもなく

妻か恋人であるかのようにも

その日に肌は降る雨の湿気に

レ・ハンは一人で入ってきて笑う

静かに潤うしかなかった

ユエンがタンと

その日に耳は際限もない
クアン・ナムの親戚に挨拶に行った日に
降る雨の音を
ユエンがタンと
聞くしかなかった。その日に
ヒエンとクアンと俱に
眼差しは雨の中に
クアン・ナムの親戚に挨拶に行った日に
はいる日差しの過剰なまでの
思いだす
やさしを黙って
死に懸けたレ・ヴァン・クアンを見舞った時に
赦しかない
何歳？
その日にレ・ハンは
18、と
ひとりで来た
いつかレ・ハンはそう云った
すでにわたしを
斜めに入るやわらかすぎる日差しのなかに
撰んでいたから。——わたしになんの許可も無く、その日に
レ・ハンはひとりで笑んだ
雨の降る音の
聲もなく
音響の中に
最初からなにを云う気もなかった
濡れもしないでひとりで来た
互いに知る言葉などなにもありはしないから
私がやった紫の
ソファに横たわる私に
笠をさして。その日に
おおいかぶっさて唇にふれた
わたしは聞いていた。耳に
その唇を
雨の音、その
唇が
かすかに遠く
やがてそれを啜えたのは
立つ音と、耳元に
それが日本風なのだと

その日に、ちかくに
インターネットで学んだからに違いなかった
立つレ・ハンの息と
その不自然をわたしは赦した
次の日の朝
彼女の爲に
レ・ハンは自分の部屋には居なかった
それを赦した
ひとりで彼女は出て行った

かくに聞き、7月28日火曜日壬生夢を見き壬生夢を見て朝夢見て醒メてメ覺メて醒メき
夢しろキ花地表に吹き出しそれ果てもなかりキ壬生ひとり永遠にも觀ず何ヲ以て永遠と
觀ずるや知らずその時を以て永遠ならんその地表果てなくて永遠な囉无その花無際限な
りて永遠那ル良無かくて久シくに花飛佐志久爾匂ひ匂ひてヒサシクに臍物が臭気に似た
りき恠しく恠しみて恠しく觀るにあやしくそれ阿彌シ久沙羅の花なりき如是也迦久テ壬
生庭に出デき寢室にはユエン未だ寢息たてヲりき庭の端のすやすやと様々にもノの影す
やすやと翳りかさなりたるに色のすやすやと落ちてありけるを恠し久てすやすやと見る
にその白き色花ノ散華したルなり祁里近ヅき觀无と欲せども壬生想ひ留マリて眼差シが
中に白の上を見上げきすやすやと大樹ありきそのすやすやと木よく知りきそれすやすや
と沙羅の樹なりき沙羅の花すやすやと夏に咲くは季節違へり沙羅の樹は葉の葉、を又枝
の枝、をかさねたるに花の白斑らにかさねて散らして咲かせをりき壬生かさねて心に正
躰もなくにかさねかさねてひそかに歡喜しきゆゑ誰にかかさねて教へんと欲せりかくて
かさねて教へんとしかくてかさねて振り返るに居間の翳りにタオ立ちてひとり笑みをり
てタオ右目赤シ壬生目を痛クし壬生かの女まさにも又號かんとせんと思へりかくてかさ
ねて女叫かず號きかケて唇かさねて又かさねかさねて喉くずレてゆゑに殊更にかさねて
笑みきその聲音なしタオかさねかの胸が前にかさなりあうように

花、

そのはなばなはかさなり

かさなりあうように左掌むすびき壬生タオが目ノ壬生を見をるを見て觀をはらんとする
にタオおもむろに掌空に叩きてひらく開きて掌床に花を散らしきその色顯らかに白カリ
キ庭ナル沙羅ノ花ならんタオ壬生ヲ見タル儘にウしろ後ろにサがりサガリシて壬生目を
そらしき右赫クして壬生目を痛ム庭の土に翳りと光りのさまざまにかさなりて光りかさ
なりて又庭の土に翳りと光りのさまざまにかさなりて翳りたるをかさなってかさなりか
さなりあつてかさなるかさなりを見をりきかくてややありて居間にもはやタオが蔭だに
なきを見テ知りき見テ知り知りをハりて壬生居間に返りソファに坐しきもはや沙羅樹が
花の 誰に教へとも覺へず時すでに7時を過ぎんとすればユエン憤りて寢室から出き
かの女寢すぐしたるを恨めりユエン壬生に怨ミて媚ビ歎きて媚びキ壬生たゞほ、笑みき
かくてユエンを見きユエン足先に撒き散らされたる花を見止むかくてユエン恠しみて壬
生に所以を問ひき壬生答へず又改めユエン問ひき壬生答へず又改めてユエン問はんとす
るに壬生立ちて立ち上がりてユエンを腕に抱き、ユエン一度委ね改めて抗い憤りたる儘
に又委ねて浴室に消ゑキかくて頌シて

あなたに話そう。
まさにあなたの爲に話そう。
その朝、庭に沙羅の花が咲いた。
あるいはとっくに咲いていたに違いなかった。
夢の中にも。
夢の中に見た。
おびただしくも地表が広がった。
地表はたゞ地表としてだけ広がっていた。
私がそれに何を感じただろう？
何を感じ、観じただろう？
私の心はただ匂いを嗅ぎつづけていた。
その、足の下の方に、低くどこまでも籠ってひろがるその匂いの、夥しく匂い立つのを。
その、生きた儘の獣の腹を裂いて引き出した臓物の臭気に似るそれ。
その臭気を。
をゝ、…ん。をゝ、…ん。をゝ、…ん。
——と。
をゝを、…ん。をゝを、…ん。をゝを、…ん。
——と、その風が折り返し折り返し、折り返す音の立つ周囲の音を聞いた。
音響はすでにわたしを取り囲んでいたのだった。
をゝ、…ん。をゝ、…ん。をゝ、…ん。
——と。
をゝを、…ん。をゝを、…ん。をゝを、…ん。
——と、それ。安らかにも感じて、安らぐでもなく。
をゝ、…ん。をゝ、…ん。をゝ、…ん。
——と。
をゝを、…ん。をゝを、…ん。をゝを、…ん。
——と、それ。危うくにも感じて、危ぶむでもなく。
をゝ、…ん。をゝ、…ん。をゝ、…ん。
——と。
をゝを、…ん。をゝを、…ん。をゝを、…ん。
——と、それ。おのゝくべき兆しにも感じられて、兆すなにももなく、笑む。
わたしはその音響を赦してそれらの爲にほゝ笑んでやった。
それが所詮、他人ごとにすぎない笑みに違いない事には気づきながらも。
私はすでに知っていた。
その地表にあまねくあまねき地表にオシナベテ？
あまねくあまねき地表爾志支奈邊天芽吹き、芽を出して芽吹き、芽吹いて芽を出したそれら、花の存在を。
私の足さえ沙羅の花を踏んでいた。
その、奇形のヒト型の小さな放射状の手がひらいたようなちいさな花。

白い、その。

それらは地表に自生した。

その地表にあまねくあまねき地表にオシナベテ？

あまねくあまねき地表爾志支奈邊天芽吹き、芽を出して芽吹き、芽吹いて芽を出したそれら、花はすでに自生していた。

んのををゝゝ...

と。

んのををゝゝ...

と、耳に獣の啼く聲がした。

奇形の蟬の羽根のこすれたような、低いピッチの高音のシャープ。

んのををゝゝ...

と。

んのををゝゝ...

と、耳にそれら無数の獣の無数に啼く聲の無数がした。

變形した蟬の羽根のようやくに震えこすれた、そんな竹笛に油紙を差し込んで鳴らしたような。

んのををゝゝ...

と。

んのををゝゝ...

と、足元に聞こえるその音響は顯らかに、自生した花の啼いた鳴き聲にちがいに
く想えた。

それは極微弱音の遠吠えだったにちがいない。

んのををゝゝ...

と。

んのををゝゝ...

と、かならずしも誰に何を訴え、何を伝えるわけでもなくて。

眼を覚ませば、翳りは開いた目の前にも垂れているに違いないと私は想った。

夢の中に、夢にあることをすでに知り終えて。

例えばあなたのその顔がそこにぶら下がっているに違いなかった。

肉に咬まれた骨の、骨に咬まれた肉の色をさらして、翳り、翳りに翳る。目覚めながら。

なにも観るとも見るともなく、たゞ永遠に見ざめながら。

私をさえすでに置き去りにしてあなたはあなた固有の翳りとして、そこに目覚め
続けて。

だから私は庭の端の地に墜ちた花の季節外れの散華の白を、かならずしも見よう
ともしなかった。

慥かにわたしは、目もくれなかった。

わたしはそう思った。

わたしに目もくれなかった花を模倣して？

あるいは擬態さえして？

わたしはそう思った。

ひとりユエンの家の中に在って、壬生は壁の向こうにコイの立てたあくびの派手な音を聞いた。まるで、これ見よがしに誇ったような。コイは町が封鎖されてから、一度たりとも家を出ようとはしなかった。自分の爲のフルーツを買い付ける以外には。頑な優等生だった。夕オは午前、めずらしく叫ばなかった。その存在さえ忘れさせるほどに。みだらなまでに美しいその普通ではない剥き目の女が、むしろさかさまにブーゲンビリアの木にでもぶら下がり、絶えかけの息の下に鳥に目玉でも栗抜かれてしまえば。... 壬生は殊更にそんな妄想を一瞬だけ見て、夕オを忘れた。かくて偈を以て頌して

せめて女を抱きたいと思った

玉散る

だからゴックに電話をかけた

水沫が

どうして女を求めたのか判らなかった

顔をあらった時に

自分でも

飛沫が

どうしてゴックにしたのか判らなかった

玉散る

むしろ

見た。鏡に

肥満に近い肉付きが

玉散る

色気に重力を与えた

顔。私の

頸に二本這った横向きの皺が

まるで三十とすこしで

肥えて盈ちてあることを兆した

時を止めたような

男を知りもしなかったくせに

玉散る。見た

だれよりも肉の色を兆した

顔を。私の

せめて女を抱きたいと思った

美しいに違いなつた

だからゴックに電話をかけた

顯らかに

その朝に

たゞ老いさらばえた

ユエンを送ってバイクを橋の下の鬩りに

玉散る。醜さをだけさらしつづけて

止めてハン川にそれを見た時に
気が付いたときには
アスファルトに向こうまで
老残の顔がそこにあった
点々と生えた翳りの肉の
玉散る。幼い日にも
骨片の色を
生まれる前から？
玉散る。その
ずっと前から
翳りの血玉を

蘭陵王第一

2020.08.04.-06.Se-Le Ma

修羅ら沙羅さら1

著 Seno Le Ma

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
